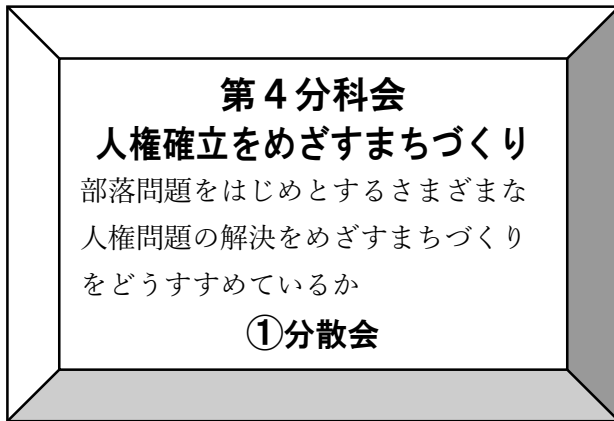




I はじめに

すべての人が安心して生活できるまちづくりのために、「つながり」をキーワードにして、全ての分散会参加者が、人権教育のあるいは人権のまちづくりの推進者として自分にできることを自分らしく、地域の仲間と一緒に小さくても取り組んでいる実践を出し合うことで討議を深めたいと提案し、6つの討議の柱を確認して、報告討論に入った。

II 報告および質疑討論の概要

ー報告1ー③

子どもと家庭に寄り添って～地域連携担当者としての取り組み～ (大阪市人教)

ー主な質疑と意見ー

大阪 報告であったネットワーク会議について。矢田地域、矢田中校区でも同じような会議をしているのか。もし、していないとすればどう広げようと考えているか。

大阪 隣保館事業で支援方策検討会が国の事業として行われてきた。包括支援センターは矢田地域全体を見る会議。子どもたちへの支援援助、部落の中でどう育てていくのかということで、2004年に子育て支援ネットワーク会議という組織を人権協会がつくりあげてきた。矢田には7校の学校がある。そこで地域担当者会議が行われている。その担当者会議の中で、子どもたちの実態を把握しようということで、しんどい子どもたちをネットワーク会議の中に組み入れていった。小中一貫校を中心に先生方と連携しながら、地域も動いてくれている。ネットワーク会議は児童相談所、区役所等と知恵を絞りながら各組織と連携しているがやっぱり頑張っているのは先生方。我々は報告を聞いても個人情報があり、その家に家庭訪問できない。そこで先生方にアドバイスをしたり、各行政機関の内容、受け皿を示している。各組織

がバックアップして先生方を支えることで子どもたちが健やかに育つ。その組織が子育てネットワーク会議。矢田地域全ての学校となると莫大な数になってしまうので、非常にしんどい実態に対して各機関が連携して取り組んでいる。矢田地域にそれぞれ核になる組織を作り上げることが理想。

千葉 リョウ君をDVが懸念される義父のもとに帰す判断の決め手になったものは何か。

報告者 父親は家でも子どもに虐待をしているので、母親と一番下の子を家に戻すことによって、子どもの命が救えるのであれば、戻したほうが賢明ではないか、母親が戻ることによって子どもたちへの虐待が少しでも無くなるのであればと考えた。学校、区役所等が入って家庭の背景をみていった時に戻そうと判断した。

徳島 報告者の前に地域連携担当をしていた。どこに行ってもしんどい子はいる。そこで地域連携担当のようなポジションが必要。自分のクラスに自閉症の子が転校してくるということになったが、なかなか学校に来なくて、家庭訪問などいろいろしたが、うまくいなくて支援学校に転校していくことになったが、家庭へのアドバイスもなかなかできないし、どことどうつないだらいいのかすごく悩んだ。どこの地域にもネットワーク会議のような組織や担当がいれば子どもたちが幸せになって救えるんじゃないか。

大阪 お母さんや今のお父さんなど、家の人の思いをもう少し聞かせてほしい。

報告者 一番上のお兄ちゃんが施設から出て本校に就学してきたが、その当時お父さんは子ども間のトラブル等で学校に乗り込んできたりしていた。お母さんがシェルターに行く話をしたことでお父さんがひとつ変わった。もう一つはネットワーク会議のなかで、スタッフがノウハウを持っていて、お父さんと子どもにいろんな面談等を打ってくれたことで変わってきた。今は会うとお父さんから笑顔で声をかけてくれる。お父さんが変わってくると同時に、お母さんも変わってきた。

三重 うちの学校で車の中で生活していて家に居ないようだというのがあったが、どこにつないだら対応してもらえるのか、誰に相談してどう継

続的に関わってもらえるのかよく分からない。ネットワーク会議で話が上がった時、具体的にどう動いていくのか知りたい。

報告者 別紙資料の「やたなかスタンダード」を見てほしい。一地域連携担当だけでこの課題に対して向き合って解決していくのは不可能。横のつながりの中で連携しているが、僕は嫌がられるくらい区役所に電話をする。声聞いただけで分かるくらい、自分を覚えてもらい相手が動いてくれるように接していくことが大事。この「やたなかスタンダード」も、転勤して次の担当になった人が対応しやすいようにとつくった。学校の中で対応が可能な部分は学校でやっていく。その家庭が生活保護を受けているのであれば、ケースワーカーに連絡を取って「ちょっとこの家庭、家に帰っていない、学校に来てない、何か情報を持っていますか」と投げかける。そこで情報をいただいたり、訪問してもらったりする。子どもに関わることであれば、子育て支援室に電話をする。

協力者 各自治体ある程度は整っていると思うが、自分が住んでいる町の市役所の中に、何という課があってそこでどんなことをしているか分からない。分からないで済みますのではなく、どんな課があるか、どんな対応ができるかを電話で聴くことは簡単にできる。そういう点検活動からやることはどこでも誰でもできること。一つの子育て支援、そして子どもの育ちを保障するということにどれだけ大人が係わり切れているか、それぞれの町の中でもう一度問い直していくというところを提起していただいた。

一報告2-⑤

集会所とYと私 (千葉県同教)
—主な質疑と意見—

大阪 Y君の両親がMさんとの結婚に反対しなかったと報告にあったが、なんで反対しなかったのか、分かる範囲で教えてほしい。

報告者 詳しくは聞けてないが、Yは「うちは反対はなかった。その前にMのことをしっかり話したから」と言っていた。

大阪 今の質問は、Yの両親が反対するのが当たり前というような捉え方をしているのでないか。

大阪 Y君のうちの背景とか知りたかった。そういった背景も含めて今のY君があるのかを知り

たかった。

兵庫 ①部落研の活動内容とムラとのつながり
②Yの「来たくないだったら無理やり来させても意味がねえし」に対して、ある教員が「Yにとって部落研が本当に大切になってきている証拠だな」と言ったと書かれているが、そのところがつながらないので補足してほしい。

報告者 ①活動内容については、月一回第四土曜日に近況報告を兼ねて互いに話をしたり、最近あったことなどを教員から投げかけたりしている。現役高校生を呼んで青年たちと繋がりたいと思っているが高校生は参加できていない。②「来たくないんだったら、無理やり…」というのは、「つぎ部落研いつあるの？」とYから聞いてくるようになったのが、1月のすごく落ち込んでいた頃で、Y自身が部落研を気にかけてくれるようになったのはどうしてかなと思ひながら、高校生が今日も来なかった言ったとき、「無理やり来させるような場所ではない」とYから言ってきたことは、Yにとって大切なもっと知りたいと思える場所になってきたのかなと思った。

兵庫 部落研の近況報告からは差別事案が見えないが、まちには差別がないのか。

千葉 (報告者の補足) 東葛同研は、高校生、青年部たちの集まる部落研と、教員とじいちゃんばあちゃん親世代とつながっている定例会とを毎月1回持っている。ムラのおじいちゃんが定例会の中で話してくれてから始まった荒川の皮工場見学を続けている。そこに部落研メンバーも参加して、部落産業を実際に見てくことや朝鮮学校の生徒との交流もあった。集会所では、ニュースでとりあげられた部落差別発言について意見を出し合っている。里親のもとから通っている生徒をMと出させたくて、その子とその子の友だち二人を誘って参加している。そこで自分の生い立ちのこととか話して意見交換している。教員もかつてあったどうしてもほどこけない思いを青年たちの前で話して意見交換をしている。

福岡 ①「俺は地区外出身なんですけど、Mちゃんと結婚して」と自己紹介した場面で、教員の「当事者はどう思っているの？」は唐突に思えるがその質問の意図がみえない、どういう流れでそうな

ったのか。

報告者 「Mちゃんと結婚してここにいます」の後、何を話したか覚えていないが、少し趣味の話とかしてた気がする。その途中で別の教員がYの話が終わったと思って「当事者はどう思ってるの？」と隣にいたMに振ったと思う。その時に、僕自身もなぜそこで当事者ということばを使うのか、「えっ」と思った。

三重 自分自身が部落研で学んだことを、高校で子どもたちにどのように教えているのか。もう一つは高校と部落研との連携について教えてほしい。

報告者 初めての試みとして、高校生二人に部落研に来てもらって話すということをしたが高校全体との関わりというのはまだできてない。東葛同研の定例会に参加している人に高校に来て講演してもらっているが、ゆくゆくは若者たちの声を届けたいと模索中である。

大阪 部落差別の現実に学ぶというが、今の部落差別はどうなっているのか、部落差別のなかで今MもYもどう向き合っているのかということが大事。子どもに部落が聞かれたら「部落差別受けるんやで」くらいしか言わない。「お父ちゃんは部落差別なくすためにやってるんやで」と言うだけで十分だと思う。高校になって自分で物事を考えるようになれば、一生懸命勉強したら分かる。親がとやかく説明しないとイケないとは思わない。ましてや、ずっと部落差別を受けてきた私の上の世代は部落差別どうのこうのといわれても答えようがない。「お父ちゃんもお母ちゃんも頑張るとるんや、お前も頑張れ」というだけで十分と思っている。今部落の問題が、ネット等で充満している。非常に悪質なのがある。そういう状態に対して被差別部落の我々がどう対応するのか、皆さんがどう対応するのか重要な課題としてある。部落研としてやってるわけだから、当然部落問題っていったい何なのか今どうなのか、部落研って名前つけてるのも部落差別あるから。

1964年京都であった全国高校生部落問題研究会に参加したのが私の出発。ものすごく大きな刺激を受けた。一番大きな刺激は、この問題は部落の人がやるんだと思っていた。そのつもりで行っ

たが、そこに数多くの部落外の高校生が来ていた。びっくりした、部落外の子がやってるのに俺がやらへんのはおかしいやないかと思って、それ以来ずっとやっている。そういう形での連携つながりが非常に重要なことでないか。

三重 「差別をする人が当事者」ということばにずっと引っかかっていた。報告者は差別をしている側が変わっていくべきという捉えなんかなと思った。そう思うんなら自分のクラスの子たちにもきちっと先生たちと同じ考えを持って行動できるように話していくことが大事かなと思う。3年前に朝熊の中学生学习会に行った時にある子から「先生、なんで自分たちがこんなふうに学ばないかんの。学ばないかんのは先生とこの学校の子やないの」言われた。その時に「そのとおりやな」と答えた。やっぱり考えていかないかんのは、周りの子たちやと思うので、これから先生が高校に帰って、クラスの子たちと一緒に学習することで行動できる子が増えていくといいなと思う。

三重 この問題は部落の子だけではなくてすべての人が考える問題ではあるが、そこにまだ到ってない。そこをリーダーシップとしてやれる人が引っ張っていかないかん現状なんかなと思っていて、明日「つなかい」の3人が発表してくれることを嬉しく思っている。本当は教員がもっとリーダーシップとらないかんと思う。

兵庫 自分の町の中では自分の町の問題しか見えない。ここに来ると全国のいろんな問題が見えてきて、帰ってからいろんな話ができる。ここに来ることがきっかけで新たな人権問題にとりかかってくれるよう若い先生に声をかけてきている。「無理やり来させても意味がない」ということがあったが、1回目無理やり連れてきても、2回目3回目になると行くことで何か求めたいという気持ちになってほしい。

1日目の総括討論およびまとめ

徳島 市役所で滞納している保険料の取り立て業務をしている。税金や保険料を払えない人の中には、悪質で払わない人もいれば生活困窮で払えない人もいる。支払いたくても支払えない人とも接してきた。そのなかに部落の人もいる。おばあちゃんとお孫さんの世帯で両親は育児放棄していておばあちゃんが頑張ってずっと育ててきた。

事業に失敗して税金の支払いが難しいが何とか払わなければという相談。税金の滞納が多く取り立てが厳しくなっているが、そういった人たちが減免とか給付の制度を知らない人が多い。詳しく話を聞いて、こういう制度が使えますよと案内すると共に、必要であれば生活保護の担当とか他の給付金の担当に引き継ぐ、これが言いたかったつながりの一つ。役所で一緒に働く人間として、横のつながりを意識して心がけてきた。そこで心からありがとうと言ってもらったことが何回かあって、つながることの大切さを実感した。

大阪 21年間同推、地域担当という立場で仕事をしてきた。若い先生にずっとこのことを続けてほしい。きっと自分の財産になる。大阪では子どもを支えるネットワークが全中学校で始まる。その新しいネットワーク組織が本当に子どものためになるのか、新しい差別や偏見を生むようになるのかは教員に託されている。それぞれの現場で部落差別でないかと気づけばそれを発信する、その発信を横のつながりで教員仲間と確認し合い、そこに地域をつなげていくことが大事でないか。

兵庫 公民館で人権学習会をしていて、開会のあいさつで「年に1回くらいはこういう人権学習会に参加してほしいですね」と言った。後で運営委員の一人が「館長、僕365日毎日悩んで考えとるんです」それを聞いた時に、なんてあいさつをしてしまったんだとすごく反省した。部落差別はなくなってはいないが確実に薄まってきていると思う。こういった学習を重ねてほしい。

大阪 「当事者」という言葉と「部落から逃げられる」という二つのキーワードがあった。学生時代に矢田の地域に入って50年間活動している。一番最初に入った時に、当時の支部長さんから最初に「君らのような若い人が来て活動してくれるのは大変ありがたい。でも、君らは矢田から出たらいつでも部落差別から逃げられる。わしらはどこへ行っても部落差別から逃げられへんねんや。そのことをしっかり頭に入れて頑張ってくれ」と言われた。そこまで言われるんなら逃げんことと思って50年間やってきた。部落差別はどこに行っても逃げられない。50年間頑張ってきたのは一つは（間違いではあるが）部落に同化しようと思

った。自分自身は部落民として生きられると思って頑張ってきたが、それは実は違う。僕自身が直接部落差別を受けた経験がないわけだから、そういう意味では部落出身者として生きていくことはできない、でも差別ときちんと向き合って生きていくことはできる。自分は差別から逃げないなくす側に立っていこうと思うようになった。矢田地域で毎年新転任研修をやっていて運動の歴史など語るが、本当に一人一人の参加している人に響くのは、「いい出会いをたくさん積んで転勤した時に矢田でこんなことを学べた、こんないいことがあったと言ってくれることなんだ」と、常々言っている。我々解放運動の活動家が100回話よりも100人の参加者がそれぞれの現場に行った時に、それぞれの場所で部落差別と向き合ってきたと話をしていく、それが部落差別をなくす近道だと思っている。

徳島 矢田で教員になって人権の大切さとか人間の温もりとか人を大切にするこの意味を学んだ。その出会いと関わりの中で自分の差別心を見つめて段々心がきれいになっているのがとても幸せ。転勤して距離は離れているけど心はいつも矢田にある。今日も仲間と出会えたし、また、次年度新たな仲間を連れてくることで広がりをつながりを作っていこう。

千葉 1本目の報告を聞いて、いろんな行政機関が連携して生徒を助ける大きな力になっている。野田市で活動しているが、中核地域生活支援センターという県の依託を受けた障がい者の問題、DVなど何でも支援してもらえるセンターがある。ムラの障がいがある子のところに通ってると必ずセンターの人と出会った。教員は学校とか教育委員会とかで止まってしまって、地域にどんな支援の力があるのか知らずに閉じこもっている。そのヒントを1本目の報告からいただいた。2本目では、上野さんは逃げられるかもしれないけど、Yは、部落差別が起こったとしたら、それは自分のことじゃないかもしれないけれど、大切な連れ合いや子どもが差別されるということで、それが当事者じゃないといえるのかと考えて、そのYと付き合う上野さんはどういう立ち位置にいるのかということをもっと突き詰めない

といけないと思う。資料集13ページに県別のレポート本数が出ている。これを見ると東日本が少ないことが分かる。東葛同研は必ず1本は出し続けてきた。千葉県がなくなったら東の端がもっと西の方によってしまうという危機感を持っている。東北から出ていない、中部、関東も出していないところがあるということは、ムラの人が置き去りにされているということだと思う。

1 日目まとめ

「差別の現実に学ぶ」という言葉は、人を救うことにつながるんだということ。「今日も机にあの子がいない」という言葉があるが、子どもが置かれている生活実態をつかんでいった同和教育担当。これまでの姿というのが、差別の現実の中にいる子どもを、その子の生活の中にある生きづらさをひとつひとつ解消していったという、その部分の延長線上に今のこの取組があるんだということ。

徳島の行政の方から、生活困窮家庭への関わりから、その人たちを救う手立てというのを行政の立場だからこそできることがあって、制度を知らなければそれを届けなければならぬ、届けたらこんな方法があったんだと希望が持てるというところで、それぞれの立場で、学校の教員にできること行政にできること地域の人にできること家族だからできること友だちだからできることがある。そういうところから差別の現実に深く学ぶというところを大切にしたい。これからの世の中では同和教育の維持というのがもっとも重要になっていく。そういう意味があるというのを確認しておきたい。

二つ目は、当事者というところで論議が進んでいったが、部落研というのは何のためにあるのか、誰のためにあるのかというところで、上野さんの報告のMさんが「部落だからとか部落の人でも部落でない人でも、一緒になって学べる場所があるんだよ」と言っている。部落差別の問題を取り上げるとき、する側とされる側の関係性の中で捉えていくと必ず無関心をつくっていくことにつながっていく。関係ない人がつくられていく。そうすることで、差別をなくす仲間としてつながっていけないという状況をそのことが生み出す。部落があってもなくても教育現場でみんなで勉

強する。こんなことがあっていいのかというところを学ぶから、「これっておかしいね」と言える子どもが育っていく。その学びの場が人をつなぐということが、たくさんの発言のなかから確認できたのでないか。差別をなくすための生き方ということで矢田から発言があったが、部落差別に向き合って生きていくことはできる。これは世の中にいる人誰にでもできることだと思った。それから100人の学びが100個の差別をなくすことにつながる、だから一つ一つ学んでいくことがどれだけ大事かということを感じさせてもらった。心がきれいになっていくのが嬉しいという発言をしてくれたが、私なりに解釈すると自分の中にある差別意識を追い出していくということではないかと思った。だから学びというところで同和教育が意味するものというのを捉えなおす機会になったのではないかな。

一 報告3-④

つなかい～つながる・つなぐ・つなげる～

(三重県人教)

一 主な質疑と意見一

兵庫 「つなかい」という会の名前の意味を教えてください。

報告者 レポートのサブタイトルに、「つながる・つなぐ・つなげる」と書いてあるが、この「つな」からとって「つなかい」。「つながる」は自分たち仲間がつながるということ。「つなぐ」は自分たちだけではなく後輩たちにもつないでいく。「つなかい」の活動をとおして人と人をつなげていこう仲間を増やしていこうという意味のつなげるで、造語である。

大阪 「朝熊」と聞くと、あの朝熊闘争の朝熊かと思ってワクワクして聞いていたが、会の立ち上げの時、自治会長さんのところへ行ったら書いてあるが、解放運動をしている人のところへ行ったらとは書かれてない。いま、朝熊地域の解放運動はどうなっているのか。

三重 伊勢市朝熊町自治会の区長をしている。朝熊集会所で学んだ子どもたちが、社会に出てからも部落問題を通してお互いのつながりをさらに深めていこうと始めたのが2年前。そのメンバーが自治会の委員会に来て結成のいきさつを報告した。委員会は、若い世代が集会所を離れた後も

部落問題について真剣に考えてくれていることをきいて、「つなかい」の取組を応援してくことになった。かつては運動も盛んであったが、今は動きが見えてこない状況。自治会長の私が父親ということもあって相談に来た。「つなかい」の取組をよく思わない住民もいるが、青年が作ったこの活動をこれからも応援していきたい。

兵庫 「あさま21（地区学習会）」というのは解放学級にあたるのか。自分のところでは、解放学級がなくなって、今は部落の子に限らず、誰でも参加できる形の仲間づくりを中心にしたような活動で、なかなか部落問題につなげる学習が難しい。子どもたちとの学習会を始めるようになったとあるがどういう内容で行われているのか、どんな声掛けをして集めているのか教えてほしい。

報告者 今学習会では、テスト勉強の時もあるが、子どもたちのどこにも出せない思いを聞き、知ったうえでその子と関わったり保護者と話したり、その子の仲間とつないだりすることを大切にしている。部落問題をテーマにしてみんなで学ぶということはしていないが、子どもたちの暮らしの中には部落差別のこともあり、別のところで部落問題学習してきたけれども自分としては納得がいかなかったとか、腹が立っているだとかそういう本音を話すこともある。

学習会を始めるにあたっての家庭訪問での声掛けは、「つなかい」をどうしてつくったか、子どもたちが仲間とつながっていく、部落問題の不安があればそのことが話せる場を保障したい、だから来てほしいと声をかけている。

協力者 学習会を始めるときに、彼女たちは分担して一軒一軒家庭訪問して内容を伝えていくところから始めた。立ち上がった頃のことを知っている人がいるのでお願いしたい。

三重 朝熊はあまり運動団体が強くない。解放子ども会のような地盤もなかった。そういう中で保護者や子どもたちと部落問題について学んでいきたい、そのために小学校が主体となって保護者と話し合い立ち上げたのが「あさま21」。子どもたちは子どもたちで集まって先生たちと勉強する、保護者は保護者で別に集まって子どもたちが学んだ内容を学ぶ。子どもたちが学んだことを家

庭で話題にした時に一緒になって話し合えるようにと考えた。これが「あさま21」の原点。

三重 絢香さんが家族との話ができるようになったというところで、僕もそれが今の目標で、部落と出会ったきっかけを聞きたい。

報告者 出会ったきっかけは、私は地区外出身で隣の小学校に通っていた。中学校の時に仲良くなった子のことを話している時に、おばあちゃんから出身はどこなんか聞かれたので、どういう意味か母に聞いたことがきっかけ。私自身は住んでる場所を聞いて傷つけてしまったことも、聞かれてドキドキしたこともないが、でも母の話（住んでる場所で差別されとる人があるんやよ）を聞いた時に、相手を傷つけることやったらだめだと思ったので、中学生の時は聞かなかったらいいんだと考えていた。集会所で働くようになって、この考えが違うということに気づいた。

三重 おばあちゃんと今の関わりを知りたい。ばくもおばあちゃんがきっかけなんで、きちっと話をしたのかどうか。

報告者 祖母は私が朝熊集会所で働いている間も、私が働いている場所は朝熊じゃないと言い張っていて、近所の人には「孫はここで働いている」と違う場所の地名を言い続けてきた。その都度「こんな仕事でこんな人と会ってな」と言って朝熊の話をしたり、朝熊で育てた花を持って「町の人に配ったんやけどばあちゃんもどうぞ」と朝熊のことを正しいことを知ってもらおうと思って何度も話した。私が働いている間は、ずっと朝熊で働いていることを認めてもらえなかったが、最近は「また行っとんの、あの人らとやっとなの」といった感じで聞いてくることはある。

兵庫 今後の「つなかい」の具体的な取組について聞きたい。

報告者 まちの中でもっと認められていかないかんと思う。保護者にも地域の人にも子どもたちにも、そのために清掃活動したり家庭訪問したり学習会をしたりということが続けていきたい。中だけで頑張っても差別がなくなっていくことにはつながりにくいので、外の行政、学校の人たちと手をつないでいきたい。

兵庫 子ども学習会の活動時間帯と部落問題学

習をする時の資料等の準備について知りたい。

報告者 月に1回夜7時半から9時までで、子どもたちの習い事のない日や自分たちの都合のつく日の兼ね合いで決めている。資料を用いての学習会はしたことはない。自分たちの思いとか経験をもとに話し合いをしている。

大阪 レポートに朝熊という名前が出ているが、3年前まではA地区という表記だった。被差別部落そのものを明示するということがあたかも差別のように言われて、自分の地域を誇れとか言いながら、一方では名前を語ってはいけないというのがあった。朝熊という名前を出せるところまでやっと来たと思っている。このように若い人たちが取り組んでくれることはとても大切なことだと思っている。最近の大学生は部落問題を知らない。自分の問題としては非常に遠い問題になっている。身近な若者が「実はね」という形で話題にしてもらえ、そういう状況が必要だと思う。その核になってもらっていることは素晴らしい活動だと思う。その時に、やはり自分たちが悩んでいる部落差別というのはどういうことなのか、どういう状況に今なっているのか。今名乗れないという人のなかには、名乗ったら差別されるんじゃないかという慄きがあるから。そういう慄きは確かにあるんだけどもそういう慄き恐れは30年前40年前と同じなのか、確実に変わってきている。先人の頑張りで部落差別そのものも解決に向かいつつある。

三重 小学生、中学生、高校生も親にも言えない、その思いを言えるきっかけなど教えてほしい。

報告者 私たち大人もそうだけど、ふとしたことだと思う。本当に聞いてほしいというタイミングがその子にとってのきっかけだと思う。そうなるまでの関係をどうつくっていくかということが大事だと思っている。私も10年間教育集会所で指導員をして、これまで子どもたちと関わってきて家のことも知っているので、きっとその話をしてくれた子は私がその子の本当に小さい時からのことを知っているから打ち明けてくれたのかなと思う。

和歌山 2年前に研修会で朝熊に行かせてもらった。「つなかい」がリードして頑張っているところ

ろはすごいと思っている。年配の人が組織の中でしっかり活動している様子は聞かせてもらうが、運動も強くなく、教育委員会も消極的な中で若手の人たちが立ち上がって頑張っているところが響いて、自分が関わっている子ども会では感じられないところが感じられると思って朝熊に通わせてもらっている。

三重 朝熊の小学校から転勤するときに、協力者から「周りの学校に行った時にきちんと部落問題学習ができることが大切」と言われた。今二見浦で4年の担任として二見町の素敵なおところ地域に出かけて勉強している。二見町だけでなく周りの町の素敵なおところを勉強することも大事ときいて、隣町の朝熊町でいろんな話を聞かせてもらった時に、その人の生きざまに触れ、間違いなく自分たちで部落差別をなくしていかないかと子どもたちは思った。それは教師集団でも一緒と思う。今年の夏に二見の小中の校区連絡会の研修会で講師として呼んだ。教師が思いを感じないと子どもに熱を持って正しいことを教えることができないと思ったから。その時講師は、「全ての子どもたちに部落問題を教えてほしい、先生たちの自分の思いを語ってほしい」と言われた。すべての子どもというところがキーワードだと思う。

一報告4ー②

訓谷区における演劇活動～命と人権を尊重し合える地域づくりの取組～

(兵庫県人教)

ー主な質疑と意見ー

大阪 解放劇がはやった時がある。一番最後に解放劇を見た時ショックを受けた。出演者がすべて手にセリフを書いた紙をもって読んでただけだった。セリフくらいちゃんと覚えよというのがその時の感想だった。今日見せてもらった劇は素晴らしい三番叟の伝統だと思う。こんなにいい伝統を僕も出たいなという人に門戸を開いて、その人たちと一緒にずっと継続していくことも一つの方法でないか。この伝統ある劇をずっと続けてほしい。

協力者 20人の人が結束している。次世代にどうつないでいくかという課題も出された。演じることで伝えていく部分と、演じることで自分自身が学んだ部分を付け加えてほしい。

報告者 自分ところの地区だけではなく、賛同し

てくれる人など門戸を開いて人材を確保したらという示唆をいただいた。私たちはこれをやることで見方が変わってきたと思う。人権問題が自分の身近なところに日常的にあるということが分かったし、日常の中で誰かのちょっとした一言、何気ない行動のなかに何か変だな、何か気になるなという人権感覚の大切さに毎年取り組みながら気づかされ再認識させられてる。

兵庫 「引き裂かれた親子」というハンセン病を題材にした劇を見た時に、出演者のつれあいが目の前にいた。そこで、「涙のシーンは本当に上手だな」と言うと、あれは本当に泣いてますよということだった。一幕一幕の中で本当に勉強していかないとその気持ちにはなれない。一昨年の「百日かせぎ」にしても小学校の文化祭で演じたがここだけで終わらせるのはもったいないということで町民の集いで演じた。もっと多くの場で見てもらいたい。劇の一つ一つに学習の積み重ねがある。

千葉 取組としてみんなで人権意識を高めようとする気持ちは伝わってくるが、例えば先ほどの部落の人が立ち上がろうとしている演劇を、立ち上がれない当事者が見ていたとしてどういう受け取りをするのか気になった。

報告者 旧町時代から同和教育が盛んに取り組まれてきた。中心となる香住小学校は県の研究指定校として熱心に取り組んできた。解放学級もあって今は人権教育推進事業ということで小学校の杉の子学級、中学校のあすなろ学級が46年目を迎えている。周辺の子どもたちも巻き込んで交流学習を中心として人権学習を学校と生涯学習が一体化して行っている。部落問題に対する町民の意識はかなり高いし学習会もなされており先進的に取り組んでいるところだと思っている。周りの理解が高まってきていて、町では差別意識が低いと思っている。

千葉 橋のない川の映画と自身のかかわりのある人々が重なって力になっているのかと感じた。人権劇をやっているというもとなるところをもっと聞きたい。

報告者 映画を見て絶対に許せないと思ったのがルーツであるし、大学の時に出身の友だちがいて4年生の時就職のことで悩んでいた。身近にい

る仲間を苦しめる差別をやっつけたいという気持ちを今も持っている。

福岡 題材はどうやって選んでいるのか。全て部落問題なのか、小学校、中学校、高校など別枠でしているのか、みんなの反応はどうなのか。

報告者 戦争と平和、命と人権に拘っている。アンケートはとっていないので、道であった人の反応や啓発研究委員会や社会教育関係者から具体的な感想を聞いている。学校へは特に提供していないが、文化祭には小中学生も来て見てくれている。

大阪 訓谷の演じている人たちが地区外だとすれば、「百日かせぎ」は皆さんの地域ではなく丹波地方ということ。その事実を今の末裔の人たちがどう感じているのかをディスカッションできたらいい。部落外の人が演じることはあるがそれを部落の人がどう受け止めるのかが大事だと感じたから。

三重 劇をするに当たって地域の人の反対の声はなかったのか。あった場合どう対応しているのか。

報告者 反対の声は聞いていない。いつまでも頑張れといわれている。

三重 部落問題を演劇という形で伝えていくのは、若者にとっても部落問題を考えるきっかけになるのでいいと思う。私自身紙芝居で勉強したことが印象に残っている。見た子どもたちにもつながっていくのでぜひ続けてほしい。

大阪 平和、仲間、命という人権に関することに関わって40年間学芸会を続けている。子どもの素直なきれいな心の中に正しいもの美しいものを刻むということを大事にしてきた。6年生が自分たちの未来は輝いているという劇をする時に、ある子が美容師になるという話になった。その子の祖父母は聴覚障害で50年間散髪屋を頑張ってきた。この機会にその子と担任とで散髪屋に行って、祖父母の苦勞を聞き取ってそれをセリフに入れていった。子どもの心に劇を通してしっかり入れるということを大事にしている。年配の方が一生懸命取り組まれている、そこに子どもたちも入っていけたらと思う。

兵庫 小学校の杉の子学級は学校を巻き込んだ

学習会で、地区で学んだことを学級返しと言って学校全体で学習をしていた。2月に学習発表会がある。1年から6年まで素晴らしい発表をしている。成人して同窓会があった時、他県に行った同級生がありがとうと言ってくれた。就職した先で、部落差別を受けて困っている同僚がいて、そこでそれはおかしいことだということが言え、同僚を助けることができた。それは杉の子学級で勉強したおかげだとお礼を言われた。地区内だけでなく地区外の人みんなが勉強して高まっていくことが大事だと思う。

一報告5－①

結成25年西中国同和教育交流会の成果と課題
－1995年～2019年－ (広島県同教)
－主な質疑と意見－

兵庫 県単位で活動しているということだが人数は何人くらいか。

報告者 できた当初は80人くらい。ここ何年間かは25、6名で、どこにも予算はない。協力金もない、全て手弁当。この大会も交通費も自費で来ている。そういう中で高齢者が引いていくと、若い世代は厳しい。

島根 なぜこの会が発足したのかというと、1992年に島根の高校で賤称語を用いた差別発言があり、糾弾会がもたれた。93年には、島根の会社で統一応募用紙について理解されておらず40年間社用紙を使い続けていた。生徒がそこを受けて親の職業等訊かれて、それは答えられませんといったことがあり、そのことが大きな問題になった。会社は後で一生懸命取り組んでくれたので良かったと思っているが、この二つの事件は高校がからんでいる。島根の問題として、地域の差別が厳しくて、親が子どもに帰ってくるなどと言って外に出すという話が随分あった。これではいけないと高校の教員何名かが動き始め、それに合わせて先進県に学ぼうという形で広島に声をかけ山口にも加わってもらって3県でやっていけるようになった。当時全同教にも加盟していないし、組織があることも知らなかった。何とか島根も全同教に加盟したいという気持ちで広島、山口に学びながら島人教ができていった。

報告者 兵庫県からの質問の件で、どこの県も最初は同教組織が元気だった。25、6人というのはや

らされるのではなく自分の使命という感じでやっている。そういう中から育ってきた子どもたちもいるし、ここで提案することで全人教のレポーターになった人もいて確実に前に進んでいるのは事実だ。今一番若いメンバーがいるのが山口県でこれから期待できる。広島と島根は現職で来てくれているのはごくわずか。最近は広島県同教の事務局長と私が交替で提案している。全人教も来させてもらって一人でもやっていかないとはいえないと思っている。できることをしっかりつないでいきたいし、今日のような若い人の話は元気が出る。

山口 再任用で同じ学校に努めていて、新採用や、臨時採用の人が職場にいる。グランドの外に出て煙草を吸っている時に同和教育の話をするとう興味を持ってくれる。萩に行っておもしろいおじさんたちやおばさんたちがいっぱいいるので一緒に飲もうと誘うと参加してくれた。若い先生たちにどうつないでいくのが喫緊の課題だが、自分ではできることをしようと思っている。

大阪 母が山口県同教に所属していて、3歳の頃から全同教に連れてこられ、20年前から参加している。9回目10回目あたりから西中国にも参加させてもらっている。改めてレポートを見て母がこんなことをやっていたというのは何か分かるが、内容については幼すぎて分かっていなかったが、人権・同和教育で子どもたちに向き合っている先生の姿勢をみて育ったのかなと思う。今人権関係の仕事をしているが、そのきっかけに西中国同教や全同教になっている。教員になる人が多い大学に進学した。教員になる必須科目や選択科目をとったが、人権に結び付く講座がなくて、そういう中で同じ世代の人たちが教員になるという怖さも感じた。若い世代にしっかりつないでいくことの大切さを思った。ぜひ教員に頑張ってもらいたい。

大阪 広島は全同教で活発にやっていたところと思っていたが、今はごく少数の先生が頑張っているというかたち。それはなぜか。

報告者 広島県同教と言いながらかつては2万人いた会員が同好会の集まりになっている。一番大きな原因は1998年の是正指導というのがあっ

て、教育の政治活動の問題、部落解放運動との密着度の問題、日の丸君が代の問題等がある活動が制限された。社会運動との決別がねらい。

大阪 広島では同和教育、部落問題学習は基本的にはやれないのか。

報告者 研究大会は年に1回やっているが、昔のように3千人4千人規模ではなく、よく来て2百人程度の研究集会。学校から出張を認められてくるわけではなく、自前で来ている。自前で頑張ろうとしてきたがそれはいつまでも続かないのが現実。

大阪 2016年の部落差別解消推進法を具体的に活かすとかできないのか。

報告者 最近やっと県教委も認め始めたが、最初は同和教育係から人権教育係になったが、途中で心豊かにする教育係という、いわゆる道德にシフトしたので、今の学校現場は、被差別の立場に立っている子どもたちのことは置き去りになっている。子どもを大事にしない。仲間が集まってくれるのは同和教育のいいところ。何かを発信したいと、考えていることはある。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

協力者 つながりキーワードに2日間討議してきた。①すべての人に届ける人権・同和教育をどう進めるか。解放子ども会や解放学級等、地域で学んだことをどう自分の職場地域で活かしていくか。②「自分たちが今悩んでいること、生きづらく感じていることは何か。それはどんな差別がもたらしているのか」という提案があった。目の前にある具体的な事実にとだけ目を向け取り組んでいるのか。③「つなかい」で語れることが学校で語れない。語れる関係をどうつくっていくか。これらを柱に実践を交流する場にしたい。

兵庫 先生が地域に関わって熱心に活動している間、家庭では子どもがさみしい思いをしているという話を聞いた。PTAのことで夜9時頃学校に行くときまだ先生が仕事をしている。こんな働き方でいいのか。地域で解消のヒントになる取組があれば知りたい。

報告者 連れ合いも同職で、担任をしている時はどちらかが早く家に帰るように話し合っていた。いま地域連携という仕事について、事が起こると遅くまでいないといけなくなるので家族間で

解を得ながらやっている。管理職が柔軟に対応してくれている。3人の子どもがいて11時に帰っても起きて帰りを待っていて涙が出そうになることがある。同業で仕事のことが分かっている、子どもにきちっと説明してくれる人が家にいる。学校にも家のことを考えてくれる管理職がいることで活動しやすい恵まれた環境にある。

兵庫 結婚について否定的な回答をする人が、分からないを含めて半数以上いたり、20代で部落問題を知らない人が増えている。インターネット上で悪質な書き込みもある。そういう実態の中で杉の子学級は地域の方が関わって長く続いている。杉の子学級がある時は朝全校放送があるが何の違和感もない。教職員も若返っている。進めていくには思いを知ることが大事だと思う。先人がどんな思いをしてきたのか、今どんな思いをしているのかを大事にしたい。今年地区の青壮年と教職員の懇談会があったが、そこで若い先生も知識だけでなく実際の経験を聞くことで熱や思いが伝わってくると思う。

大阪 インターネット上で暴きが当たり前のようになっている。それに対して我々が告発するということだけではなく、我々自身がそれをどう理解するのか、どう立ち向かえるのかというノウハウが必要な気がする。無視するのも一つの方法だが、共感する人も一定数いる。そのことに関して真面目に向き合う必要があるんじゃないか。特措法の33年間はいったい何だったのかという総括は必要だができてない。部落差別に負けてる部落の人たちがいっぱいいることは事実。名乗れないということも、人々が持つてる部落に対するマイナスイメージを自分もどこかで受け止めてしまっている。いま重要なことは部落の我々が部落差別とどう立ち向かうか、その前に部落差別はいったいどうなっているのかという問題が非常に重要なことだと思う。両側から超えるということが言われている。当事者性ということと言うと部落差別をする側の人の当事者性があるとしたら、部落差別を受ける側の我々の当事者性もある。その二つが乗り越える状況をつくるには、腹を割った話し合い、糾弾ではなく告発ではなく話し合いという手立てで迫っていく必要があると思う。

三重 僕は部落出身ではなくて、部落との出会いは中学校の時、祖母が友だちに対して部落差別をしたのが始まり。遊びに行くと言われた。先生が教えてくれてそれが部落差別だと気づいてそこから活動するようになった。ずっと祖母と向き合ってきたがなかなか分かってもらえなくて、「私は部落差別をしていない」と言うし、意識を変えていくのは難しいことだと実感している。でもずっと向き合い続けていきたいと思っている。高校の頃から、部落の子と遊んでも教育集会所で活動することに関しても「あんたがやりたいんならやればいいんじゃない」と言ってくれて、祖母の中で意識が変わってきたと感じていたが、去年の全人教大会の時に行ってくるということを話したら「あんたに関係ないやろ」と言われて「関係あるよ」と話したが全然分かってもらえなくて喧嘩になった。全人教大会の後も家族と話したけど全然分かってもらえない。祖母が兄に「こいつ部落のどこ行っとるんやで、どう思う」と聞いた時、兄から「えっ、こわ」と言われた。兄は二つ上で中学校で一緒に勉強していたはずなのに「こわ」ということばが出てくる。兄にも部落に友だちがたくさんおるはずなのにすごいショックやった。真剣に取り組んでいる僕に対し叔母は「あんた部落か」と言った。部落やからということ考えるとかではなくて、みんなが考えないかんこと。どうしたら変わるのかなというのが僕のかかえている問題だが、こうしていろんな人が意見交流できる場が大事だと思っているし、今ここにいる僕らは同じ考えで集まっているし、もうすでに仲間なんやなと思う。

三重 1点目は、2日間で牛を通じてとか「つながい」とかいろんなつながりができた。いろんなところに出かけて行ってつながって仲間を増やしていくことがまずは大切だと思った。2点目は、自分なりに思いを持つということ。家は松坂牛の飼育農家。牛のことは大好きだけど父母が一生懸命育てている姿をずっと見てきたので牛のことはずっと大切にしたいと思っている。自分自身、ひどいことや嫌なことを言われたこともある。昔は言い返せなかったが腹が立ったり言い返したい自分がいた。大切にすることこそ伝えたい思い

が出てくる。自分も思いを大切にしたい。3点目はこれからどうやって仲間を増やしていくかが課題。今日来ていない人を人権同和教育について一緒に考えていく仲間にどう引き込んでいくかが課題。

大阪 25歳の時に結婚差別を受けた。人権教育、同和教育をちゃんと受けてないから親も反対するし、した方もされた方もしんどい思いをする。子どもが5年生の時に立場についてどう教えたらいいのか分からなくて、ええ高校ええ大学に行って大手の会社に勤めて大きな家を建てたら差別なんかされないと教えた。それから子どもと一緒に勉強を重ねていって、30年近く全同教にも参加して、自分の中にある差別心に気づかされた。子どもと共に育っていく教員にも出会った。残り少ない人生で今度生まれ変わったら絶対教師になりたいと思っている。教師というのは子どもと向き合って心と心のやり取りをしながらやっていく素晴らしい仕事やと思っているから。50年前自分は結婚差別を受けたが、結婚の時反対はなかったのか。

報告者 今のつれあいと結婚するときに反対はなかった。私のことも活動のこともよく分かってくれていて、一緒に差別をなくしていく仲間の一人。

三重 志摩市は部落差別をはじめあらゆる差別をなくす条例に基づいて、最重点課題として取り組んでいる。朝熊で若い人たちが一生懸命取り組んでいるこの取組が続くように自治会の立場から話したい。伊勢市、伊勢市教育委員会が啓発をやる気があるのかどうか分からない。未だに地元でフィールドワークができない。地元の責任というけど、本来は伊勢市が朝熊の同和対策事業をやった時に、ソフト面もしっかりやって、寝た子をしっかり起こすというのが伊勢市、伊勢市教育委員会だと思っている。今も同じような状況なのか聞きたい。

三重 伊勢市では、若い人がなかなか後につれない、自治会の役員も引きついでくれる人がいない。「部落差別はもうない、何でそんなことしてるんや」という声もよく聞く。三重県で5、6年前に人権に関する県民の意識調査の報告書が出た。結

婚の問題で親に話した場合、3分の1はやめとけという意識を持っている。伊勢市の場合は市民意識調査をしていない。市の職員を対象に意識調査している。その結果、同じように被差別部落に対する誤った認識が現れている。部落差別解消推進法が出たが、行政はそういった取組に消極的である。他の人権課題についてはやるが、解消法が出ててもなかなか腰を上げない。ポスターを貼っているくらいで具体的な取組をしていない。学校の先生もたくさんいるが、部落差別が本当にあるのかどうかきちっと認識しないといけない。部落問題を解決していくためには、差別があると認知をしないと次に進めない。差別をなくしましょうというだけでは、現実を見ないときちっと伝えられない。きちっと認識して部落差別をなくす行動を起こしてほしい。

大阪 30 年位前から小中学校の教員が部落問題の学習に立ち上がって取り組んできた。その流れがあって子どもたちと頑張っているが、法が切れて子ども会活動もなくなり支部の活動もほぼない状況の中で、だんだんと教員自身が部落差別というものを感じなくなっている。子どもたちも差別を受けたとか自分が部落の人間なんだとかも聞かせられないままに育ってきているのではないかと思う。教員も子どもたちの意識だとか親の意識だとか町の人の意識だとかに切り込まないまま来てしまっていないか。そこに切り込むことに怯えてしまっていないかと思う。水平社宣言の勉強をした後、宿泊学習で語る会というのをやる。そこで仲間と語り合ってつながってこうという 30 年間やってるが、「西光万吉めっちゃカッコいいやん」という話になって、「俺、語る会で自分の立場言うわ。俺が言うと、現実に差別があることがクラスのみんなに分かるやんか、だから俺言う」と言ってきた。担任が「そのことを家で話してみな」と言ったところ、母親は影響が大きいからやめなさいと止めて、そこで今回はやめるとその担任に言ってきた。担任が家庭訪問して話したらどうかということになったが結局行けなかった。親が言うんならいいや。私は人権担当だったが、行かないやんやというところで引いてしまった。そのことで怒られた。「先生らはやっぱり 3 年間だけのこ

とやんか、3 年間すんだらええと思ってるんやろ。差別は、この子らには一生のこと何や」。でもそこに踏み込めない学校や私ってなんなんやろ。皆さんの話を聞いてもう一度学校に持ち帰って話しようと思った。実態をまず自分たちが把握してそこからまた動き出さないといけないと思った。

三重 朝熊に関しては寝た子を起こすなという考えが多いが、今も部落差別が現実としてあることをしっかり伝えた中で取り組んでほしい。

和歌山 和歌山市では初任者研修で、人権同和教育研修が一コマある。今年度から部落に行って、話を聞くということになった。その後フィールドワークをするという形に変わった。

分散会まとめ

差別の現実に関わることが、課題を自分のものにする。差別の現実に向き合うことは、自分自身に向き合うこと。そして自分の課題に出会うこと。沸き立つ思いは、当事者につながる。そして差別をなくす仲間として育つ。差別に打ち勝っていくことは、自分の人生を拓き、子どもの未来につながる。

2 日間の討論を終え、私は今、このように思います。「つながり」とは何なのかを改めて考え、問う分科会にで始まった分科会でしたが、皆さんにとってはどんな 2 日間になったのでしょうか。「つながる」というテーマでまとめてみたいと思います。

大阪からは、保育所、学校、地域、行政がつながって被差別の状況に置かれている子どもの育ちを保障していく子育て支援ネットワーク会議の取組が報告された。この取組の中で特筆すべきは SSW の要素を備えた動きのできる地域連携担当者の存在だ。地域連携担当者は、これまで差別をなくするために動いてきた同和教育推進教員の姿そのものだった。保育所や学校の中にその子に寄り添い、その子の暮らしの実態をつかみ、必要な支援のために動く大人がこんなにも多くできていくことが、その子や親にとってどれだけ安心できるということか。指導要録用語でない言葉で、その子のことをどれだけ語れるのか！という靴底減らしの同和教育の営みそのものだといえる。

また、学校や保育所で、子どもの置かれている現実が見えた時、どうしていいか分からずに放置されていかないのも、地域の中にしっかりと子育て支援の存在やシステムが見えているからで、NW会議が機能し、課題の共有とかかわりの具体が早急に進んでいくからだ。ケース会議等のネットワークは、どこの自治体にもある程度整っている。しかし、その現実に関わるのは人だ。どこに立って何に関わるのか、その人の差別に対する立ち位置が常に問われることにもなる。このNW会議は、同対事業失効の後に住民の自立向上に向け、組織づくりした地域包括支援センターの機能のひとつであり、解放運動の成果が地域にしっかりと根付いていることの裏付けでもある。生きづらという差別を解消していく関わりの具体を作ってきた人権のまちづくりにつながってきたことの証でもある。

差別の現実の中に立ってつかんだ課題だからこそ、学校を超えた地域の中で共有され、各機関でのつながった動きができ、ネットワークがつながって、本当の意味での子どもの育ちの保障になる。子どもの育ちは学校だけでも、家庭だけでも完結し得ないことの実証となり得るのだ。

村上さんは、「一つの家庭に対して、たくさんの目で手立てを考えることで、より良い方向に導くことができている」と語った。かつて私が関わった部落の父親が、「簡単なことじゃないから、みんなで考えてほしいんだよね」と語ってくれたことに重なる。

法が切れても差別はなくなった訳ではないといい続けて久しい。格差社会の中で、社会から切り離されたところにある子どもの貧困は、どこにでも存在する。今の時代だからこそ、これからの未来を拓く実践として学びたい。どこに立って何に関わるのかを明確にしてこそ、子どもの目の前にある差別の現実を一つ一つ解決していくネットワークになるのではないだろうか。

討論の中で行政の立場から、生活困窮世帯へのかかわりの具体について、給付制度など、生活を支える制度をしっかりと届けることで救われる例や、そこで見えてきた実態を生活保護課へつなげるかかわりが出されたが、それぞれの立場で差別

を解消することにつながる行動を起こしていけることも確認し合えた。

千葉からは、差別の中の当事者は誰なのか、部落解放子ども会、解放研は、何のためにあるのかについて提起してもらった。「俺は息子に部落の血を引いているよって、伝えるつもりはない」と語っていたYが、同推を離れても、転勤しても集会所に通う上野さんに「部落のこと教えてくれない?」「俺が差別してるんだよね」「言わないって言ったのは、こんなにまだ差別が溢れている世の中じゃ言えないって言った方が正しいのかな」と変わっていく。自分の本当の思いに気づいていく。Mは、「部落の人でも部落でない人でも一緒に学べる場所があるんだよと伝えてほしい」と答える。

立場の自覚とは、部落出身であることをただ知ることではない。被差別部落の子どもに限る話でもない。子どものまわりにどんな社会があって、その社会の中で、自分がどう生きていくか、反差別の自覚であるといわれる。そのためには、自分自身を隠さず安心して語れる「居場所」が必要になる。自分を差し出すから、相手の思いが返ってくる。差し出してくれたことに返そうと思う。一緒に頑張っていこうと差別に立ち向かう思いがつながる。

会場からは、部落研で学んだことを高校でみんな学ぶためにどうつなげているのかという指摘や、高校での学びをつくって差別をなくすところにつながる子どもを育て増やしてほしいという意見が出された。また、部落問題はすべての人が学ぶべきことだが、近づけていない現状の中で、学校教育において、まだまだ学びの場をつくるためのリーダーシップを発揮すべきではないかとの投げかけもあった。差別をなくす当事者とは、社会の中の全ての人であって、社会の中の多くの人が関わって学ぶからこそなくせるのではないだろうか。

する側・される側の関係性の中で捉えていくことは、一方で無関心を育てることにもなる。そのことが、なかまのつながりを断ち切り、部落差別に向きあわせないようにする。互いの対話がなされてこそ、差別解消に向かっていくことを会場からの意見にも重ねて確認できた。部落研、解放子

ども会は、そんな場所である意味も確認できた。

このことは三重の「つなかい」からの報告にも重なる。宮武さん、山田さん、久田さんからは、自身の遭遇した差別体験から、「社会に出てからも集い、部落問題を語れる場所が必要だ」と感じ、厳しい地域の実態の中で立ち上げた「つなかい」について、社会の中でのその必要性を報告された。また、差別をなくしていくためのつながりとは何かを考える提起でもあった。

その中で、宮武さんは、中学生になり「あさま21（地区学習会）」の存在がなくなると、社会の中の根強い差別意識の中で、自分を守るためにふるさとを隠すようになったことを、「言えないということも誰にも言えなかった」と振り返る。だからこそ、なかまがいる、一人ではないと思えることがどれだけ心強いことか、そんな私たちだからこそできることがあると「つなかい」立ち上げへの熱い思いを届けてくれた。また、教育集会所で働いた10年間に地域の人に出会いながら生き様に触れていく。その中で、「先人、先達とは、身近にいたじいちゃんだった」とふるさとを誇る思いが芽生えていったと語った。そんな思いを持てたのは、「あさま21」で、子ども同士や、親や先生といったそこに関わる人の温もりのある関係性の中で育った体験がベースにあり、同時に、「あさま21」が差別をなくす主体者を育てる場になり得ていたことを確かめられた。

山田さんは、「どこか部落差別に対して他人事だった自分が、つれあいの切実な思いに触れ、差別をなくす行動を少しずつ考えるようになった。地域の関わりのあった朝熊が大好きです。いろいろな考えを乗り越えてつくってきたということが今はよくわかる。そんなふるさとを子どもたちにも残していきたい」と、久田さんは「教育集会所で子どもに寄り添うこと、関わることを教わった。出身を聞くことは、相手を傷つけることになると思っていた。聞かなければ差別していないと思っていたのは、自分と部落問題を遠ざけていただけだったと気づいた。集会所は『私の居場所』と教育集会所での指導員としての経験を通した出会いが、自分を変えてくれた、誰かに自分の思いを聞いてもらいたいと思えるようになった」と

語る。誰かのことでどれだけ悔しいと思えるか、誰かのことでどれだけ頑張ろうと思えるか、差別に対する思いを持てるのか、自分事に感じられることが、差別をなくすためにつながっていく証ではないか。そのような営みにこそ拘りたい。

取組から、差別に向かっていく力は、当事者としての自覚と人権の学びを通してつながったなかまの存在から生まれるのだということ、そして、自分自身に向き合うということは、当事者としての自分、差別に中にいる自分を自覚させ、そこから出発した取組はどんなに萎えそうになっても、負けそうになっても折れない、ということも同時に確認できた。加えて自分を差し出し語ることで、後押ししてくれる地域の方々、子どもの将来を案ずる親の思いが声となって届き、子どもの学びの場が広がったこと、教育の力を信じて、先生とつながりたいという思いも届けてくれ、「つなかい」のような部落問題を考える活動が、社会に一步を生み出す力を育み、そこにつながる人を育てる場になることを確認できた。会場からの、「ふるさとを誇ることが、名乗ることにつながっていかねば、本当の意味の差別をなくすことにつながっていかないのではないか」との投げかけにも集約された。

では、社会の中でそのような学びの機会を多くの人に届けるためには、地域に根差した活動をどうつくっていくかという課題に対し、兵庫の福井さんからは、地域で盛んに行われてきた地芝居につなげて人権の視点を取り入れた演劇を通した啓発活動について報告された。取組の出発点には、福井さん自身の部落問題に対する確かな思いがあった。福井さんは部落差別の現実に出会う中で、差別のおかしさに気づいたことを「起こされた自分」と語った。差別はする側だけの問題でもなく、社会にとともに暮らす誰もが、その中にいるということを感じさせてもらった。また、福井さんは、「上演作品のテーマが、日々の生活に根付いたものでなければ、地域住民のつながりが深まるような気付きにはならない」とも語った。そうでなければ、よそ事、他人事になり、ただの観念で終わる。学校でも職場でも地域でも、自分に関わる暮らしの中に課題が見えてこそ、自分事として差別

の問題を考える機会になる。このような学びが今こそ求められている。学びのベースである「暮らしを見つめる」ことを大事にし、そのことに拘っていくことの提起となり、会場からの意見にも重ねて確認できた。

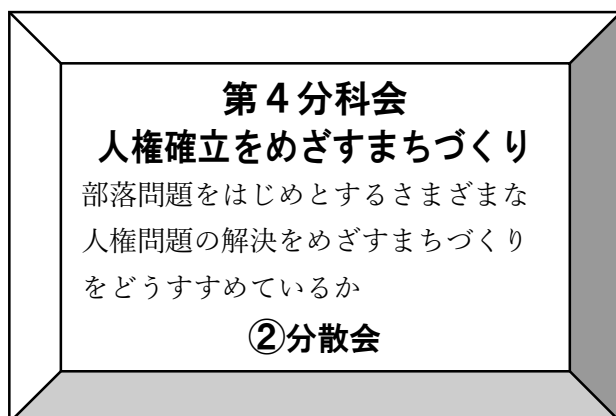
さて、差別解消を目的とした法律が施行されて以降も、悪質なヘイトスピーチ、ネット上での書き込み、悪質な差別事象が、これまでとは違う形で発生し、本人の知り得ないところで、簡単に、多くの人に向けて拡散されていく。一方で、解放子ども会活動などの差別に立ち向かっていくための力をつけ、なかまになっていく場が灯火の状況にあるのも現実だ。取組が進まない現状に対して、これまで同和教育が大切にしてきた、より深く関わることや、自分を差し出し確かにつながっていくための学びやつながりをどうつくり続けていくかについて、広島からは、県を超えた25年の交流会の歩みが報告された。部落差別をなくすために未来に向けて何をすべきかの会場への提起になった。

報告者が、「つなかい」のような若手の立ち上がりに元気をもらったと述べられたように、次世代が担う活動の場の立ち上げは、これからの時代を切り拓く重要な意味を持つことを会場全体で確認し合えた。そして、このような活動の場が、社会の中で力を発揮していくためのノウハウとして、今、自分たちが悩んでいること、生きづらく感じていることが、どんな社会からもたらされているのか、ということに気づいていく学習がなされてこそ、様々な形態で現れてくる差別に打ち勝っていく具体的な内容として、全ての人に届ける学びとして確認しておきたい。

報告の中で、宮武さんが「つなかい」は安心して打ち明けられる、相談できる存在であり続けた。差別に不安を持っている（学習会に通わせられない）親ともつながっていきたい」と語ってくれたことは、部落差別解消推進法の具体として求められている相談体制の充実そのものではないだろうか。そのことは、学校にも、行政にも、地域にも、社会の中の様々な場面に切実に求められていることを、今一度自覚していく必要があり、どここのまちにも求められているニーズとして確

認しておきたい。

子ども、そして親を含めたその子の育つ生活環境に、より深くかかわる営みが日々展開されている。どんなに地域の実態は違っても、そのことを具体化していくことが、ここに集まった一人ひとりに求められています。まずは、自らが差別をなくす主体者になるために、2日間の学びを誰かに伝えることから始めましょう。どんなに小さな取組でも、人権のまちづくりの推進者として、自分にできることを自分らしく地域のなかまと取り組んでいくことを確認して、本分散会のまとめとします。



I はじめに

分科会「討議課題」を共通確認した後、当分散会では「自分と向き合う」「現実に向き合う」「自分を語る」をキーワードとして、反差別の仲間づくりやつながりについて明らかにしていくことを提起し、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1— ⑦

このまちで、自分らしくいきっていく ～わが子の居場所～ (愛媛県人教)

— 主な質疑と意見 —

愛媛 「りとる・4ぶんの1」設立の経緯や思い、取り組んでいて問題点などがあったら教えてほしい。

報告者 親子で通う療育機関です。小さい頃に関わった先生が「りとる・4ぶんの3」で支援してくれるので、安心して通わせることができる。

愛媛 報告者とともに活動をしている。「りとる・4ぶんの1」は、親が一人で悩みを抱えず、親の仲間づくりの場でもある。ずっと子どもと一緒に親も成長していきながら、四国中央市で生き生きと希望を持って子育てしていけることをねらいとしている。そして、今、小さい子で悩んでいる

親に、報告者たちが先輩として生の声で相談にのれるように、保護者どうしで相談し合える場になっている。

大阪 息子さんの進路を決定するにあたって、どんな悩みがあったのか。また、その時に親子ホームとか周りの方とどんな話をしたのかを教えてください。

報告者 いろいろな所を見学しに行った。息子の様子から多くの人数の中で生活するよりは、人数の少ない所で少しずつ自分のできることを習得できればいいと思い決めた。親子ホームの先生や先輩たちの話を聞いて、いろいろと考えて決めた。

島根 私の来年小学生になる孫が自閉症です。報告を聞いて、娘の気持ちや孫のことを考えた時に、私自身の心に差別心があると思った。娘たちは、特別支援学級に行かせようと考えているようで、この報告を娘へのお土産にしたい。

愛媛 一緒に通うことで、親は子どもの発達段階を順に理解できるようになる。だから、就学時に子どもにとって一番いいと思う選択ができる。それと、子どもが成長しても、小さい頃の特性はほぼ変わっていません。「4分の3 B型」では、小さい頃に特性をつかんで、対応の仕方を保護者も関係者も知っているので役立つ。

愛媛 B型事業所を始めるにあたって、職員で確認したことがある。一人ひとり特性はちがう、ちがう特性をもった利用者さんたちが自分に向いていること、やりたいと思うことを見つけられる事業所になりたい。小物のお店ですが、商品を作ることが目的ではなく、自分の居場所を見つけてもらうことをモットーとしている。

愛媛県 親が作業所を立ち上げて、段々と年を取ってきて、立ち行かなくなるのではないかな。先行きの見通しをどのように考えているかを教えてください。

愛媛 若い人たちを雇い入れている。次に雇う人は若い人をできるだけ雇っている。そして、私たちが徐々に引いていく計画をしている。

— 報告2 — ⑧

「こんな日があるなんて想像できなかった」
～里親として、心に傷を抱えた子どもたちと共に
くらす～ (島根県人教)

— 主な質疑と意見 —

熊本 今まで里親として関わってきた子どもたちの関りはどうだったのか。おとなへの信頼感がないだけでなく、子どもどうしの仲も裂いてくる。それがどのように修復され、関係づくりをしていったのかを教えてください。

報告者 人を信頼することができない子どもが多い、Aちゃんも高校で同級生とトラブルを起きた。まずは私との関係性を構築しないと、友だちとの関係もうまくいかない。関係性ができると、学校で友だちうまくいかないことを話してくれ、相談事や悩みの支援ができ、いろんな方向から考えることができるようになってくる。まずは一人の人を信頼していくと、他も少しずつうまくやっけていける。

熊本 信頼できるおとな（人）として関係をつくらないと、単に「荒れた子」とそれを指導する教員という関係性では学校が回っていかない。結果的に、子どもの中も切ってしまうということを経験した。信頼できる人との出会いをきっかけにして、子どもたちは子どもたちの同年代の中こそ、輝いてほしいと願う。

島根 私の校区に報告者の施設がある。報告者とつながることで、施設から通っている子の家庭状況や施設に来るようになった経緯を知ることができた。今、その子が安心安全に毎日を過ごしている姿は、報告者のおかげだと感謝している。

島根 高校で教員をしている。生徒が報告者の施設から通って来ている。入学当時は目立つ感じではなく、内側に抱え込んでしまう感じだったが、表情がだんだん柔らかくなってきた。今、3年生になり、進路について、本人の希望、経済的な事とかを保護者とも話をしながら進めている。暮らしを高めるということは、将来の進路を保障していくことにつながる様子が実感として見えた。

兵庫 里親として、学校に望むことや連携の視点などを教えてください。

報告者 里親家庭だけで、問題を抱えた子どもたちを完全に支援していくことは、本当に難しい。その中で、一番に協力してもらえるのは学校の先生だと思っている。委託が決まったら、まず学校にあいさつに行く。児童相談所の担当にも、その子の特性や環境の話をしてもらう。一緒に暮らし

て見えてきたことや気をつけてほしいことは、その都度担任と話をしている。

— 1日目総括討論 —

協力者 この分科会は社会教育の人権のまちづくりとして、「差別をなくすということが具体的にどういうことなのか」「自分と向き合うということなのか」、その中で気づけたこと行動に移していくことがまちをつくり、社会を変えていく。「寄り添うとはどういうことなのか」「向き合うとはどういうことなのか」「自分の周りにどんな現実があって、どんな出会いやつながりの中で向き合ってきたのか」ということが本日の報告や会場からの意見であった。そのことに具体的実践を重ねることで討議の方を深めていきたい。

大阪 登校支援、家庭への支援を含めて子どもたちを支援している。寄り添うって、「そうやな」とうなずくとか、とことん聞ききった上で、信じる。それは、教職員との間でも保護者との間でもそうだと思う。厳しい家庭ほど助けてと言えない、声なき声をひろっていかねばいけない。社会とのつながりのネットワークが大事にし、保護者どうして集まる場とか悩みを出し合う場とか、助けてを言いやすい環境とか、地域と連携して工夫していかなければと感じた。

滋賀 聞くとか、受け入れるとか、寄り添うとかよく使われる言葉であるが、使う人によって意味がちがう。暖かい熱と光を込めて使っている二人の報告を聞いて、人が人の思いを聞くということは、その人の存在を大切に思うこと、聞いた以上一緒にやる、絶対この手を離さないといった力強さ、そういったものの土台の上にある「聞く」「受け入れる」「寄り添う」ものであるべきではないかと思った。

島根 報告者の施設の厨房は、料理台が壁側を向いて子どもの姿が見えない作りになっている。また、壁に包丁が並んでいるのを見たときに、子どもを信頼していると思った。寄り添うということは、子どもたちを信頼している、子どもたちが信頼されていることを感じられることが大切である。

愛媛 人を変えるというのは、その人のすべてを受け入れることから、ぬくもりを伝えながら、相手の自己決定を待ち続けるしかないと思った。寄

り添うということをもう一度見つめ直して、その子のスピード、その子の思い、そして家庭の状況や思いを受け止めながら、ともに同じ方向を向いていくことであると感じている。

— 報告3 — ⑥

「光座をとおして」

(熊本県人教)

— 主な質疑と意見 —

三重 小国町役場では、どんな考えで取組をしているのか。劇のアンケートで、具体的にどんなものがあつたのか、また、劇を観た町民が部落問題の認識が変わったかを教えてほしい。

福岡 劇団と支部の関わりとか、支部はどういう思いを寄せているかを教えてほしい。

三重 報告者自身が活動を通して、感じられたことや考えられたことを教えてほしい。何度か「役立てたいとか、役立つ」という言葉があつたが、どんなことが役立てたと思うかを教えてほしい。

報告者 役場の取組について、支部と町で話し合いながら進めている。活動することで、差別の解消に向けて少しでも進めていければという思いが、役立ちたいという言葉になった。観た人からは、「はっきりと差別という言葉を使わずとも、観客の子どもたちはおかしさに気づいていたのを感じました。」といった感想をもらった。

熊本 支部の子どもたちが劇に出ている。子どもたちが学校や保育園の先生、役場の人に来て、一緒に芝居をするから楽しいと言っている。子どももおとなも、劇を作っていく過程が楽しいと思っている。今まで接点がなかった人と、終わった時に「みんなでやって、よかった。来年もやろう」という気持ちにさせてくれるのは、みんながつながっているからである。劇を観た人が、少しでも解放同盟や先生たちが差別をなくすためにしているとわかればいいという思いでしている。私はこれからも光座に関わっていきたい。

滋賀 私の子どもが通っている同和保育所の保護者で、太鼓チームを作っている。ステージに上がることで、子どもになぜステージに上がるのかを聞かれるのが怖いと言っていた親が、最後のステージの前に太鼓が終わるのが嫌だと言った。私たちはそんな関係をつくってきた。私は社会が広がる度に差別に出会ってきた。子どもの世界が小学校、中学校へと広がる度に、親として差別に出

会っていくかと思うと、その時こそ、この仲間といたいと思い、卒園しても太鼓OB会を作りたいと思う。

— 報告4 — ⑪

「私にとっての反差別の生き方 ～自らの生き方を問い続けながら～」
(三重県人教)

— 主な質疑と意見 —

三重 活動をしていると、「若いのにすごいね」と言われることがよくある。しかし、若いとか年齢はあまり関係ないのではないか。若いからこそ、がんばりたいと全国の青年も思っている。報告を聞いて、がんばっていききたいと思った。

三重 仲間から「地区外のあなたに差別を受ける私の気持ちなんてわからない」と言われたのは、自分の立ち位置を問われていると思う。自分の住んでいる所は加差別部落で、自分は何もしなくても加差別している側だと意識することが大事だと思っている。報告の「自分に指をむける」と同じで、自分が何もしなかったら加差別部落にいるから同調しているのと同じだと自分に課している。報告の中に学習会を開いたとありました。学習会で自分は何を学んだのか、何が課題として見えてきたのかを教えてほしい。

愛媛 同和教育がはじまって半世紀が過ぎても、まだ差別があるのか。なぜ、若い人が差別をされたり、いじめられたりすることがあるのか、私は情けなく思います。私は部落差別にあったけれど、報告者のような差別にあったことはありません。いつまで差別をするつもりですか。差別をする側の人ががんばって、この研究大会を自分のものにしてがんばってほしい。

三重 私にとって、報告者と一緒に活動していることが当たり前と思っていた。私は地区で、報告者は地区外。それがなんで引っかかるのと高校生の時に思っていた。報告者が、自分はどんな立場でいたらいいのか悩んでいるのを知っていた。なんでそんな思いになるのかと思っていた。全高全青に参加して、周りの「地区じゃないのに、がんばっているのはすごいよな」「地区じゃないのに何で活動しているの?」という声を聞いて、自分たちから線を引いていると思った。私と報告者の間にそんな線を作りたいくない。同じ人間として部落差別を許さないだという立場で活動していき

たい。

三重 私は隣保館で地区学の運営に携わっています。いろいろな思いを持っていいこと、それがマイナスでもプラスであってもいいことを伝えたくて、地区学を受けてきた青年たちとの出会い学習を取り組んだ。青年たちが互いに語り合っている姿を見る中で、子どもたちは自ら自分の思いを本音で語り合う場を設けた。子どもたちは、「今日が一番人権のことを感じた」「される側だけでなくする側も勉強せないかん」と感じていた。こんな経験を地域で体験させて、津友に送りたい。そして、津友で学んだことを地域に持って帰って、地域に広げてもらいたい。

報告者 津友の活動を通して、自分に指を向け、自分はどのような人間なのか、どういうことを思うのか考えることを学んだ。私は差別が許せないし、なくしたいと思うから、津友の仲間と一緒に差別をなくすために、これからも差別に立ち向かうために、一緒に考えていきたい。そのために、自分がどのような人間なのか向き合い続けたい。それがつらい時もあるが、乗り越えた時に熱や光を感じる。それを一生続けていくことが私の生き方です。その生き方こそが反差別の一步なのかなと思う。

報告者 私は、自分を語るまでは津友の活動は楽しくなかった。でも自分を語った上で、仲間と話をするようになって活動が楽しいと思う。この活動で、自分を見つめ直して思いを語ることで、自身や家庭や先生と向き合うことができた。活動を始めた時、自分を出すことや語ることが差別をなくすことにつながるとは思っていなかった。でも、自分を語って、受け止めてくれる仲間がいるからこそ、語り続けることが差別をなくすことにつながると気づいた。

— 報告5 — ⑩

つながろう！子どももおとなも ～人文協活動を通して～
(三重県人教)

— 主な質疑と意見 —

三重 子どもの頃、地区学が嫌でしかたなかった報告者が、推進する側になったきっかけを教えてください。また、教師がイヤだったというのは、具体的にどのような所がイヤだったのかを教えてください。

報告者 なぜイヤかということ、地区外の子どもの

たちを遊んでいても、私だけ地区学に連れていかれる。年齢が上がるにつれて「なんで私だけ」と不思議になった。学校に行っても、自分だけ特別扱され、「なんで自分の地区だけ先生が勉強を教えにくれるのか」など疑問が湧いてきた。私が部落差別に直面したのはこの頃です。私が特別な地区に住んでいると友だちに言われた。その時に「お前の住んでいる所は同和地区だ」と親に教えてもらった。本当にこのまちがイヤだった。なぜ教師が嫌いかというと、自分だけ特別扱いをしたから、一緒にしておいてほしいと思った。私だけ特別扱いされるとみんなに同和地区だとばれると思ったから。

三重 被差別部落とばれるのではないかと、友だちを家に呼ばなかった報告者が積極的に活動をするようになったのはなぜか。

報告者 「いつまで部落差別があるのか」と本当に思う。私はいい加減終わらせたい。私は部落差別を受けてきた人間です。部落差別をなくしたいという思いだけで動いている。部落差別をなくして、次の世代の子どもたち、生まれてきた子どもたちにバトンを渡したい。自分の子どもが生まれて気づかされた。自分の子を、自分と同じ立場に立たせるのか、そうさせたくないの、部落差別をなくすことにつながることは積極的にやってきたい。

三重 活動を見直し、新たな取組をとという所で、表現力や主体性の弱さに対して、活動を見直したことで子どもたちに変化がみられたのか、具体的にどんなふうに活動を見直されたのか。

三重 人文協活動に携わっている。表現力という面では、話し合いをしても、自分の思いがでない。どちらかという先生が言われるまま活動が進んでしまう状況があった。見直しの中で、話し合い活動を大切にしている。主体性という面では、ブルトップ回収の活動をしている。これまでは、誰かが集めてくれる、学校や地域の会社などに箱を置いているが、誰かが集めてくれたのをただ回収しているだけという状況であった。自分で目標を立てて、まず自分たちが集めようという取組を進めている。自分たちのやっていることを友だちや地域の人に広げていこうという形で進めている。

三重 報告者が、自分の子に「部落差別ってなに？」と聞かれたらどう答えますか。

報告者 私の子も小学校6年で、同和地区ということ伝えた。自分は、親からマイナスイメージで話を聞いた。子どもに小学校6年から中学校3年で段階を踏んで、部落差別について伝えていこうと妻と話して決めた。小学校6年では、マイナスイメージだけを伝えるのではなく、部落の起こりや教科書無償化など、希望の光が見えるような伝え方をした。

滋賀 自分の住んでいる所の解放子ども会と働いている所の解放子ども会の交流をした。その中で、子どもたちから部落差別に苦しめられているのは部落の人だけではない、部落差別に苦しめられているのはみんな、だからみんながなくしていく側に立たないといけないという話ができた。子どもたちは、解放運動に取り組んでいる子たちと出会ってすごく刺激をうけていた。合同解放子ども会で語り合った時間を、地元と一緒に暮らしている仲間とつくりたい。人権学習で自分を語り合う時間を子どもたちがつくった。なくす側のつながりをどうつくっていくかいうのを、改めて報告から考えさせられた。

三重 学校の先生や行政は、私の血を吐く思いを簡単に語ってと言う。当事者と会って行動をともにしたら、仲間と思っていないですか。話を聞いたら、仲間と勘違いしていませんか。この大会を一人ひとりの思いをつなぐ、本当の仲間になる時間にしてほしいと思う。

報告者 部落差別は絶対になくなる。なぜかという、人は変われる。人が変われば、部落差別はなくなると思う。

— 報告6 — ⑨

「毎年花見を楽しみにしとるんよ」 — 長島愛生園桜植樹から — (奈良県人教)

— 主な質疑と意見 —

奈良 この取組は、40年前の差別事件の反省からはじまっている。住職自身が本当に変わらなければならないということが課題にあり、教団内で研修を行ってきた。「信心の社会性」という問題がある。信心があれば差別はしないというおごった見方がある。信心や信仰というものが、時には大きな差別を起すものだということを認識しなければ

ば、宗教者としての取組は無駄になるのではないかという反省に立っている。

三重 頭で理解していても、なかなか行動に移せるものではないと思うが、どこにそんな熱をもっているのかを聞きたい。

報告者 修行道場でいじめにあって一度僧侶をやめた。自分ひとりでは何ともできない、社会に問題があると考えていた。10年間、私は水平社博物館に毎月行っている。水平社宣言を読みながら、差別はなくすことができるという思いで、この問題に関わっている。

兵庫 奈良県宗教者の同和問題の推進組織とつながる全国的な組織があるのか。

報告者 これは奈良県に限らず同宗連という全国組織があるが、その下に奈良県宗教者の団体があるのではなく、それぞれが独立した形でそれぞれ活動を行っている。

福岡 宗教家が差別との関りを見つめ直していかけた思いを聞いて、教師として、もう一度自分の立場で子どもたちとの関係を見つめ直したいと思った。自分のどこに差別性あるのかを見つめ直さなければ、子どもに差別を再生産させてしまうという視点をもって、子どもたちと向かい合いたい。

三重 ハンセン病回復者が施設から出られて、再度施設に戻っておられるという現実を聞くが、どんな思いで戻られているのかを聞きたい。

報告者 社会復帰された方の多くは、社会や周りの目、偏見や差別にあって療養所に帰らざるをえなかったという話を聞く。現在においても、長島愛生園で子どもの座禅会を開く時も、家族から「あんな所に行ったらいかん」「うつる」等の話が聞こえてきた。正しい知識を身に付けるために、一つひとつ学習をして周りにも広げて理解してもらうようがんばりたい。愛生園で交流をした子がその時に一緒に作ったものを3年経っても大切に持っている。どこかで一步踏み出すことによって、つながって広がっていくと思う。そこに一步踏み出すか踏み出さないかで、変わるか変わらないかにつながる。変えるために、その一步を踏み出していきたいと思う。

奈良 長島と奈良を結ぶ会を40年間続けている。

これを教育として残していかなければ消えていく。家族訴訟法国賠償の判決が出て、法律ができた。これは人権救済法です。差別は救済されるという法律を国が作れるというきっかけになると思う。奈良県ではハンセン病に関わる副読本を作った。少しでも私たちが寄り添うこと、差別の現実に学ぶことがこれからの奈良県としても大きな取組になる。

Ⅲ 総括討論

2日間の報告者や論議の中で、次のようなことが見えてきた。

○ 人との出会い、言葉や思いを自分と重ねることで、差別に立ち向かうエネルギーとなっていくこと。

○ 自分を語ることで自分を見つめ直し、それを受け止めてくれる仲間の存在、寄り添い受けとめる、差別をなくしていく本当の仲間をつくっていくこと。また、次世代にどうつなげていくかこれらを討議することで、人権のまちづくりにつなげていきたい。

三重 自分の職場の同僚性とはどうなのかと考える。まず自分から動くことで、そこで自分を語ることにつながり、本当の仲間が生まれてくるのではないかと思う。

三重 報告の全てに共通することだが、自分の生き方がどうであるか、自分の暮らし方がどうであるか、差別をする側される側とかそういう問題ではない。差別を許さないつながりを持って、それを超えないと差別はなくならない。津友では、おとなが強要するのではなく、補助役に回っている。津友で学んだことを各支部に持ち帰り具体化することをしている。高校生だから、おとなだからではなく、反差別のチームワークが大切だと思う。町全体で差別を許さないという雰囲気をつくることが大前提だと思う。

三重 津友は各地域で活動している人が集まり成り立っている。他地域の高校生や青年と交流したり、自分のことを語ったりしながら、思いを交流することで刺激になっている。自分の地域に戻った時に、自分はこんなふうな生き方をしていきたい、差別をなくしていく自分でいたいということをそれぞれの地域に根付かせていきたい。

三重 自分が差別にあった時に、それに向き合う

のは自分しかいないだから、仲間なんていてもしょうがないと思っていた。仲間とつながることと差別をなくすことは、なんでつながっているのかわからなかった。津友の活動を通して、人との出会いの中で気づきがあった。自分は差別される側ではあるが、差別する側に立つかもしれないということをいつも忘れてはいけない。自分はそんな人間になりたくないし、周りの人にも差別を受けてほしくないし、してほしくないという思いを持つことができた。自分の地域に帰って同じ思いをもった青年を増やしていきたい。

奈良 自分が差別者だったと気づいたときに、どう差別をなくす行動に移せるかが大事だと思う。姉の子が重複障害を持っている。この子がいなかったらという思いが私の中にあった。その子が危篤になった時に姉が泣いて「この子が死んだら、私が死ぬんだ」と言った。今までこの子が姉の宝だったことに私は気づいていなかった。その時に私が差別者だったことに気づいた。差別しないというけれども、差別者から離れることができないことに気がつくことが基本にあるのではないかと思う。

滋賀 小学校5年生の時に、部落差別を経験しました。その後、心配で自分のこれから先、どうなるのかと考えた。ムラのことや差別ことを調べ、マイナス面ばかりを考えた。中学校の時に会った先生のおかげで、考え方が変わった。

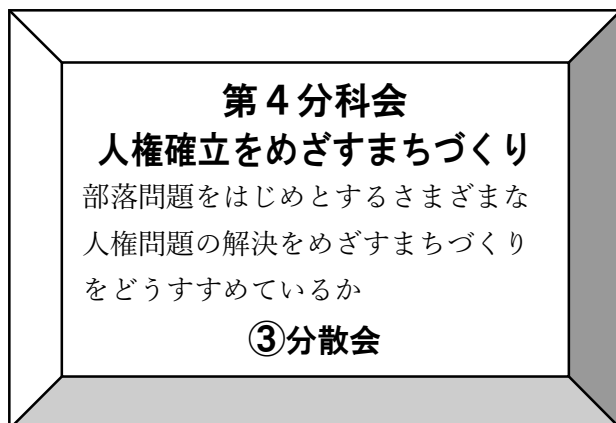
三重 「自分の周りには部落の人がいなかったから、部落問題と出会う場がなかった」とよく聞く。自分自身もそうだったが、自分自身がそんな話をしてもらえる存在となっていなかったと反省する。意見の中で「簡単に当事者の人の話を聞かせてくれと言うけれど、そんな簡単なものではない」と言われたのは、先生たちは聞きばなし、楽をしているのではないか、そこからしっかり先生自身が差別と向き合っているのかと問われているのだと改めて考えさせられた。

IV まとめ

差別が存在する社会を生きる一人として、自分がどう生きるのか、周りとはどんな関係をつくっていくのか、差別心や加差別性に自分自身が向き合うということが具体的にどういうことなのかを2日間の報告や討議の中で確認ができた。

・ 差別に対する怒りや苛立ちだけでは何も変わらないからこそ、自分が動くことでつながりや関係をつくる。動き出す時には一人であっても、差別をなくすという同じ目標（思い）があればつながれる。そんな個が集まるからこそ、仲間としてつながれること。

・ 寄り添うことは、その人の存在を受け止めるということ。寄り添うことは、聞いた側の責任としてともに歩んでいくという土台があって成り立つこと。



I はじめに

協力者が第4分科会全体の基調と討議の柱を朗読し、分科会を進める上でのポイントを確認した後、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

ー報告1-⑫

同じ目線で市民に寄り添う、隣の村上さんであり続けたい
(佐賀県同教)

ー主な質疑と意見ー

兵庫 「解放学級で自分の立ち位置を偽らず体温を持った言葉で自分の考えを伝えようとした」とあった。差別の現実を知る時、見えないところに差別があるということを感じての言葉だと思う。地区の大人は次の時代を担う子どもたちをどう育てて行くかを考えている。あなたは子どもたちにどう伝えたのか。

報告者 地区に生まれたからと言って命の重さに変わりがある訳ではなく、出身地を隠さずに生活できることが大切と考えている。自信を持って生活するためには、私を含めて皆が学ぶことが必須だと考えている。解放学級には子どもを連れた方も参加するが、私が話しをするのは主に大人であり、子どもたちには直接伝えられていない。

香川 「指導員になった頃、頭の中の差別心を解消する作業に取り組んだ。」とある。自分を変える

ということだと思うが、どういうことを自分の中で見つめ直したのか。

報告者 指導員になり差別をしないということを前提に答えを導こうと考え過ぎていた。自分の立ち位置を地区の人の立場に置き換えて考える中で、頭の中で差別心は克服できた。心の中の差別心を克服するには、地区の方と交流を通じて一生かかるものと考えている。

愛媛 地区の人との出会いの中で、「もっと仲良くしようと思うようになった」とあるが、地区の方々の生活を見てどのように感じたのか。また指導員としての今後の姿勢に影響を与えるような、励みになるような言葉はあったか。

報告者 指導員となってはじめて地区に入った。最初は暗い、怖いというイメージが少しあったが、行ってみるとどこも変わらないという印象であった。地区の人との交流では最初はお互いに緊張していたが、いろいろ教わることができたし今回の報告でも力をくれた。いつか恩返しをしたいとの思いがある。「やりたいようにやったらいいよ」と言ってくれたことが一番の励みになった。

佐賀 応援に来た立場で伝えたい。「やりたいようにやったらいいよ」という言葉は、特別なものではなく、日常の会話の中で自然に伝わったものだと思う。また最初の質問の「地区の子どもにどう伝えているか」については、我々や先生方と一緒に伝えていているが、「子どもたちに伝えづらい」という事実はある。私は思いや体験談を子どもたちに伝えており、この思いは報告者にも伝わっていると思う。

佐賀 報告内容は地区内でも聞いて貰いこのように仕上がった。報告者は指導員になって4年、地区との関わりの中で成長したと思う。指導員は女性を望む。女性は子育ての中でこの問題を子どもたちに伝えて行ける立場だからである。

愛媛 結婚に関する問題は無いのか。

フロア 伊万里市では結婚差別は20年ほど前に1件あったが現在は一切無い。ただ、佐賀県内全体でみると差別は残っている。

-報告2-⑮

「ひと」をつくるんだよ！ (滋賀県人教)
～主な質疑と意見～

宮崎 地域性はあると思うが日本で暮らす外国

人の悩みなど具体例を教えて欲しい。それからこのような取組は学校などで報告はしていないのか。

報告者 地域の全ての外国人を把握できている訳ではない。相談の対象になった人だけであるが、ゴミに関する周辺住民とのトラブルが多い。言葉の問題もある。学校に対しては、この地域にいろいろな外国人が住んでいることを肌身で感じて貰えるように、国際理解講座を開催している。

奈良 地域の役員がウエルカムになったきっかけは何か。また、地域の人の声かけ運動や水遣りを周囲の人はどのように見ているのか。それが地域の人に与えた影響はあるか。

報告者 推測だが、地域に若い力が必用だと感じたからだと思う。また、地域にいた国際交流の活動をしている人と出会うことで交流の方法を知ることができたことも影響している。声かけ運動などは地域住民だけでは手が足りないので交流の中で活動に誘ったが、外国の人が挨拶をしている姿は子どもたちに良い影響を与えた。国際交流の組織が交流を推進するのではなく、地域住民が主体となって事業を推進することが必用だと考えている。

佐賀 「ひとをつくるんだよ」、良い言葉だと思う。人をつくれば町が育つ。我々が取り組んでいる人権同和教育はまちづくりそのものだと思う。

-報告3-⑯

みずからの立ち位置を問いつづけて (三重県人教)
～主な質疑と意見～

佐賀 生活実態調査を受けて隣保館との連携を強化したとあるが、役割分担はどのようになっているか。連携の具体的内容、会議の内容や回数などを教えて欲しい。

報告者 隣保館は同和課が担当している。地域包括支援センターとの会議は昨年度から開催。今年度は既に2回開催している。会議は地域包括支援センターの生活困窮の担当と隣保館職員、生活相談員を中心に開催。支援で困っていることは各隣保館で職員が把握しており、訪問の際に情報を共有している。

佐賀 人権研修の参加者が増えたとあるがその要因は何か。また二人組で企業を訪問されているとのことだが、その具体的内容を教えて欲しい。

フロアから 人権研修の参加者が増えた要因は、ポスターやホームページでの周知もあるが、企業訪問の際に行う継続的な取組の依頼、人権問題地区別懇談会などでの周知の効果があったと思う。また、企業訪問では188社を訪問し「企業として様々な人権問題にどのように取り組んでいるのか」などの聞き取り調査を行っている。

佐賀 隣保館は福祉とまちづくりの拠点である筈だが福祉行政の蚊帳の外に置かれがちである。隣保館に軸足を置いて福祉部局と連携を強めることは大切だと思うが、検討会議の舵取りはどの部署なのか。また生活困窮者自立支援事業が根底にあると思うが、この取組を通じて具体的に進展したと思われるような事例はあるか。

報告者 推進会議の作業部会は同和課が中心に行われている。生活困窮者自立支援事業については就労支援を行っており、学習支援は各隣保館でも行っている。

フロア 補足する。子どもたちへの学習支援は地区別学習会とは別に、各隣保館で先生方の協力を得た補充学習がある。また、生活支援のための福祉サービスは申請が必用であるため取り残されるケースがあったので、隣保館として福祉部局と連携を深め対応している。そのための検討会議は重要な役割を果たしている。

京都 20才代の経験で自身の意識が変わったとあるが、その内容はどのようなものか。また、そのことで自身の社会的立場の認識が変わったのかなど、市の職員としてどのような変化があったのか。

報告者 友人から、私が付き合っていた人が地区出身で友人自身も地区出身であり、私が差別されることがあるかも知れないと言われた時は驚いた。結局結婚には至らなかったが、反対されたら立ち向かって行動することが必用と伝えてくれたのだと思っている。行動しようという思いはあったが当時は立ち向かうことはできなかったと思う。その後人権問題に関する経験を積んでいく中で差別の実態に触れた。自分も経験したが、同じ苦しい体験をした人がいることが実態調査の中に見え、積極的な対応が必要と思えるようになってきた。これまでの経験は仕事の中で活かして

行きたい。

三重 生活実態調査の報告ととらえた。個別面談方式は本音を引き出せる。差別の実態もわかる。行政職員が生声を聴くこと大切。意識改革、人権感覚が高まる。生活実態調査のデータを出せないか。または設問項目を紹介することで内容は全国に広がって欲しいと考えるがいかがか。担当者は異動で代わるので、差別を無くすシステムを構築しておく必用があると思う。

協力者 本日3件の報告に共通することは「人を育てること」ではないか。人は育てていくもの、育つものである。ただ人は勝手には育たない。人の輪の中で育つものであり、その輪の中に差別や偏見があれば人は育たない。子どもも大人もそうである。そこからやって来る差別や偏見にたった一人で立ち向かうことは難しい。そのためにこそ反差別の仲間があるのだと思う。また、先ほどの生活実態調査のデータをなぜ出さないのかという質問があったが、調査項目がとて多く、この場でその内容を紹介し議論することは難しい。この調査の内容は見るべきものではなく学ぶものと考えている。地区の人にとってはとても重みのあるもので、伊賀市の施策としてご紹介したものであることをご理解いただきたい。

-報告4-⑬

「話してくれてありがとう、聞いてくれて仲間ができた」
(愛媛県人教)

～主な質疑と意見～

大阪 あおぞら子ども会はどのくらいの子どもが加入していて、地区内・地区外の子どもの数はどのような割合か。また子どもたちにはどのような場面で部落問題を伝えるのか具体的に聞きたい。学校との連携があれば併せて聞きたい。

佐賀 子どもが立場を自覚することは難しい。その前に家庭内で部落問題について話されているのかの把握も難しい。話ができるような場所を作るところから始めないといけないと考えている。子どもたちがのびのび生きていける環境が必要とのことであるが、学校や地域で何か課題はあるか。

報告者 子ども会の構成は12名、小学4年から中学生までの希望者で、地区外の子どもの方が多い。学校教育の中で出来ることは限られているの

で、自分の事を知りたいという子どもの思いに答えられないというジレンマがある。そのような時に地域の大人との出会い、人権の話を聞かせて貰う機会を作ることも私たちの役目と考えている。

佐賀 この会に関わっている先生方に聞きたい。地域の中にある課題は何か。

報告者 全ての人が部落問題に関心を持っている訳ではない。これが大きな課題であるが、地域の人は皆、この会の中で子どもたちに積極的に関わってくれていることが嬉しい。学校の職員の中にも差別の現実を知らなかった人がいる。知ったうえで子どもたちに接する必要がある。

三重 報告の結論、他の地域の人に持ち帰って欲しいと思う内容は何か。

報告者 結論ではなく今取り組んでいることを報告した。人が成長するためには仲間との出会いが必要だ。差別を無くすための世代を超えた仲間づくりができればと考える。自分たちはそのつながりを作るきっかけになりたい。

宮崎 行政職員の立場で聞きたい。私の所には隣保館は無く、教育集会所で子どもたちに先生方、行政などが関わっているが、教員や行政職員は異動がある。でも最後まで関わって欲しいという思いがある。信頼関係や関わり方について教えていただきたい。

報告者 行政職員であろうが教員であろうが、いずれは自分の地域で生きていく。今、行政職員として学んでいることを大切に、仕事を辞めても今の活動は続けていく。

子ども会事務局 自分は行政職員で、人権問題は職員研修で学習してきた。仕事と保護者の立場で子ども会に関わっている。娘が自主的に加入し親子で学習している。幸せな事だと思う。今後異動もあると思うが、これからも積極的に関わってきたい。

愛媛 報告者の地域の人権の集いに参加したが、大勢集まり熱気がすごかった。そういう所だから子ども会も育つ。人権とは自分の思いを語ることが大切だと考えており、そのような場を作れていることがすごいと思う。自分の所もそのようにしたい。

-報告5-⑭

芦原フィールドワークから差別解消へ

～主な質疑と意見～

大阪 地区外からの流入者が多いとあったが、流入者は部落問題に対する理解はあるか。また、近年学校が同和教育に力を入れているとのことであるが内容を詳しく聞きたい。それから、中学生がフィールドワークを実施する際、そこに住んでいる子供への配慮はどのようなになっているか。

報告者 知って理解して入って来る人もいれば、知らずに入りすぐ出た人もいる。取組はできていない。教員に対しては、全ての新任教員に対して指導主事が人権研修を行い、ほかにも地区別に特別人権研修などを行っている。中学生のフィールドワークは学年単位で実施しており地区の子も含まれる。わかっても差別する子どもはいないと思うが、先生方には十分な配慮をお願いしている。

当該教員 フィールドワーク実施前の学年集会での説明の際には、職員皆で慎重に子ども達の表情を見ている。いろいろな人権課題を抱えた子どもが目の前にいるという意識を持ち共に生きるというテーマでこの学習に取り組んでいる。

兵庫 40年前ここで教員をしていた。教え子に地区の子がいた。教師が独自に考え、ボランティアで校外学習を実施していたが、そこに参加する子どもはイキイキしていた。自分は逃げたかったが先輩の熱意に導かれて参加した。報告者は自分の子育ての中で子どもに部落のことをどう伝えたのか。

報告者 子どもは小中学校で同和問題を学習した。家で直接話しをしたことはないが、若竹の講座と一緒に参加するなどして徐々に理解が進んだと思う。

報告者 自分の結婚の時は反対された。悔しかった。学習していなかったので理解がなかったことが原因だと思う。子どもには父親が説明したが、ちゃんと分かっていた。子どもの頃には差別は無いと思っていたがそうではなかった。子どもが大きくなる頃には差別はなくなっていると考えていたが偏見は今も多い。孫が結婚する時には差別がないことを期待しつつ、差別は今も残っていること伝えて行きたい。

協力者 我が子に話す時は勇気が必用。地域や学級の取組を一つの機会として伝えたという報告

であった。差別を乗り越えた経験を親が語ると、子はその力を受け継ぐと思う。

愛媛 同和対策事業で集会所ができた頃、先生方の協力もあって学べた。いろいろな組織もできた。子どもの結婚の時に差別を受けたし今も差別はあるが、乗り越えようと考えている。いつか差別のない社会をめざして努力して行きたいと思う。

報告者 親が自分の生き方をちゃんと子どもに伝えられたら子どもも大丈夫だと思う。回りの協力も得られる。早く結婚差別を無くしたいと思う。

Ⅲ 総括討論

佐賀 佐賀県には部落差別撤廃の条例ができていない。条例があることのメリットや、条例が無くてもこんな方法がある、などのご意見をお聞きしたい。

三重 三重県内は殆ど設置済み。条例があることで自然に第一歩を踏み出すことができるが、実効性を持たせるにはまだ弱い。条例が無いからできないということはない。ただ、条例があることで、実態調査を定期的に実施し、市民の意識や地区の生活実態を調べることで、各種当事者が加入した審議会を置いて条例が守られているか確認することができている。また条例は当事者を守るためのものなので、当事者目線で考えることが大切である。

三重 フィールドワークは当事者について知ることができる。また、地図が形として残るので、継続して事業を進めることができるので良いと思う。

協力者 このような事業は単独の団体だけでは進まない。学校・地域・当事者などが連携して取り組むことが大切である。

兵庫 人権確立をめざすまちづくりは誰がするのか。行政、学校(教員)、各種団体などがあげられるが、人権確立をめざすまちづくりを進めるのは市民一人一人だと思う。1人の100歩ではなく100人の100歩である。一部の人が活躍するのではなく、誰が当事者なのか。差別される側、市民一人一人が当事者として考えないといけない。

兵庫 誰が当事者なのか。女性への実態調査をしたことがあるが、部落内女性の回答では「自信が持てない」という意見が多かった。これまでそのマイナスイメージを払拭することを考えてきた

が、一体当事者は誰なのかを見定めたい。

兵庫 マイナスイメージを背負い込む必用は無いと思う。そのことを皆でもっと考えなくては行けない。そのために研究大会がある。

三重 私の町では同和対策が進んでいない。20年程前から活動しているが、市民一人一人が取り組むべきとあるが、やはり行政の主導が必用だと思う。学校での教育も大切だ。しっかり教育をすれば解決の方向に向うのではないかと思う。学校での教育の取組について聞きたい。

協力者 誰が当事者なのか。それぞれの報告の中にあったように、報告者はいろいろな出会いの中で個人が動かされ、一人一人が当事者として差別の解消に向けてどのような動きをして来たのか思いを共有したいと思う。決して一人では解決しない。様々な場所で様々な連携が必要である。私たちが動かなくては行けないが、今回の報告を受けてこれからどのような立場で動くべきなのか、皆さんにご意見をいただきたい。

兵庫 同和問題を自分のことばで語れるように、自分の事として自分の言葉で話せる場の必要性について考えることは素晴らしいと思う。

報告者 学校での教育の取組についてお答えする。就学前からそれぞれの年齢に併せた人権教育を行っている。小学校高学年は社会の学習で部落問題を正しく学ぶ。中学校でも計画に基づいて学ぶが、地域の実情に触れて学ぶ教育は難しい。地域の協力や理解が必用になる。中学校では道徳、学級活動、社会科などを中心に学校全体の活動の中で学んで行くものと考えている

佐賀 出身地で差別することは間違いだ。差別する側が悪いということ子どもたちに分かり易い教材で学ばせている。今の社会には様々な差別があるが、差別する側も幸せにはなれない。人権差別について学ぶのは自分の幸せのためであると考えている。差別する人がいなければ良いがインターネット上には差別心が氾濫している。そのような差別を跳ね返す力を持たせることが大切だと思う。

兵庫 教委の立場から発言する。道徳では部落問題を扱っていない。県が人権の副読本を作成しており、校区に地区を含まない学校でも活用して欲

しいと考えている。中学校版には地区の方の体験談を掲載し、子どもたちに部落差別という言葉に出会わせ、差別と闘って来た人たちの温かさや逞しさを学ばせている。

大阪 研究資料に対する考え方は教員間でもバラバラで一枚岩にはなっていないのが実情で、地区出身の子どもがカミングアウトしようとした時、時期が早い、周囲の理解をしてからにしようと保護者や教員が止めたことがあるが、ここに差別の実体があるのではないかと思う。また、子どもたちの目に触れるインターネット上に差別情報が掲載されるようなことがあるが、差別の現実を見つめて行動力を持たせる教育の必要性を感じる。

三重 インターネット上で伊賀市の地区が掲載された。隣保館の閉館を狙って日曜日に来て取材に来ている。行政・学校と連携して各家庭に通知したが、子どもが見たときの対応が心配された。先生方にも知っていただいたうえで、行政としても法務局にも相談した。

兵庫 私の地区では地区懇談会を開催し、小中の先生方や地区の人が参加している。その会の中で紹介された教科書では地区の人々のことを「部落民とされていた人々」と表現されていた。正しい表現だと思った。

協力者 ここまで学校現場の取組などが紹介されたが、地域での活動の取組についての報告はないか。

兵庫 それぞれの地区の歴史をもっと掘り下げると、地区や差別の実態が見えてくるのではないか。

兵庫 大会の研究課題の中に「推進法」に関わるものとして、意識調査では差別意識や忌避意識が改善の方向に向かっていたが、近年悪化の傾向にあり、若い人が部落を忌避しているという問題がある。この問題をどのように解決して行けば良いか。

香川 私の町では中学校区の教員と新任の教員を中心に、地区の方も加わって地区内で交流研修会を開催している。そこで「差別される側が恥ずかしがる必用はない。差別する側がいるから差別がある」ということを気づかされた。学校教育で

取り組むためにも、同じ思いを共有して、同じ方向に進めるよう頑張っている。

香川 部落問題は原因ではない。差別の結果として貧困や学力の課題があるが、これは原因ではない。原因は差別があるということ。つまり部落差別者問題だと思う。ではどのような視点で学べばよいのか。差別者、被差別者の立場で学ぶということもあるが、この会のように差別を無くそうとする立場の仲間が多くいる、このような事実を子どもは学ぶべきだと思う。

三重 昨年の三重県の大会の中で、若い方から「一体いつまで当事者が頑張らなければならないのか。差別を無くす当事者とは誰なのか。自分事ごとにするとはどういう事なのか」という問いかけがあった。「あなたは差別を無くす当事者になれるか」という事だったと思う。また、地元小学校の同和教育の取組だが、自分の隣の子の悩みを一緒に考え、自分事として解決策を見つけようという取組をしている。これは大人にも参考になる取組である。

兵庫 我々は日本で日本国憲法や関連法令のもとで生活している。ネットの差別書き込みなどで現場の人が苦しむことはないと思う。推進法に罰則規定があれば良いのではないか。結婚差別をずる側を罰する法律があって当たり前だと思う。

福岡 指導員を8年やってきた。交流学习の際に「また法ができた。また作らないといけない状況だということだ。寂しい。」という話を聞いた。そういう思いの方もいる。当事者でないと分からないことも多い。また、あるフィールドワークの際に「私たちは何か悪いことをしましたか。」という言葉聞いて胸に刺さった。行政では新採職員に人権同和研修を行っているが、まず行政職員が人権問題をきちんと理解して向きあっていないと市民に人権の大切さを語れないと思っている。

協力者 多方面からご意見をいただきました。会場にお集まりいただいた様々な立場の皆さんが同じ方向に向き、この問題が社会の問題であるということを通理解できたと思う。次に我々は子どもたちに何を託すか。個々が考え個人で解決しようとする点の活動を面の動きにすることが人権のまちづくりにつながるのだと思う。

IV まとめ

協力者 人を育てるためには当事者との関わりが不可欠である。当事者と共に活動する中で、取組が生まれ人が加わり、輪となって当事者も変えていくという相互性があることが分かった。報告の中ではフィールドワークの大切さがわかったが、それには地域の理解が必要で、地域の歴史や暮らしぶりを教材化し、ボランティアガイドが参加することで地域の団結が生まれ、そこから洗い出された事実を地域外に発信することで地域外の人たちも学べる。「差別の現実から学べ」ということである。ネガティブな現実がポジティブな新しいうねりを作り出すことにつながる。子どもたちも現実を知り正しく学び育つことができると思う。

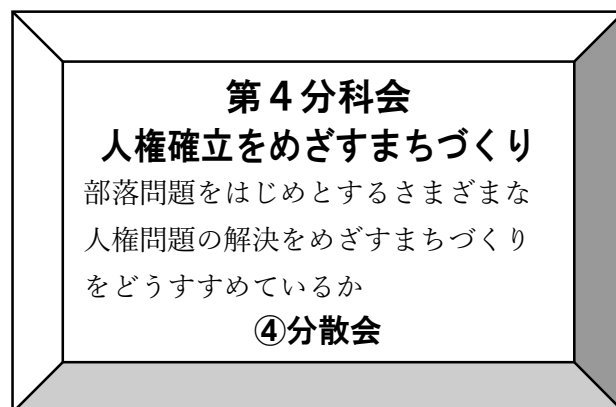
また実態調査や聞き取りによって、行政が地域のニーズを把握し差別の現実を知ることができているとの報告があった。差別の実態の把握においては意識調査も大切である。行政の役割としては企業啓発・企業訪問も大切であり、実施すれば効果はある筈である。

それから取組の中で、差別が見えにくくなっているということが報告された。これについては「差別の現実を見える化」する作業が必要だと感じた。

「あの子と遊んだらいかん」という親がいまだにいるという話もあった。膝を突き合わせた啓発が必要であろう。対象が子どもであれば教員が関わることになるので、教員にはそれなりの知識やスキルが必要になる。不動産業者への啓発も大切であり、自主的に学習することで正しい対応ができるようにしてもらいたい。身元調査も同様である。ここでも行政が主導で「差別の現実を見える化」する作業が必要である。皆が差別を無くするという立場で共働しないと人は育たない。人が育つ姿を見ることが、他者の育ちにつながる。そして地域に輪が生まれ、その中で人が育ち、人権のまちづくりが実現化できるのではないかと思う。報告の中には行政・学校・地区などの関わりが指摘されたが、それぞれの役割分担は必要だ。行政は意識調査などの施策を実施することで現実を把握し、教育委員会や学校はそれを教材化し教育

を進める。それには地区を含めた様々な人たちの協力が大切であり、地域の一員である企業や地域の団体を包括するグループも必要で、差別をなくす運動をどのように作り上げて行くのかを一緒に考えながら、つながりを強化しなくてはならない。

そしてそれぞれが連携することで取組が進むが、それを構成するのは我々一人一人の人間なのである。つまり差別を無くしていく主体は一人一人の人間であり、このような大会でその思いを共有できたことには大きな意味があったと思う。



I はじめに

分散会をはじめに当たって、報告者や、参加者が「部落差別をはじめとするあらゆる差別をなくす」という思いを共有し、目のまへの差別に向きあう実践者として大切なことを明らかにするために、討議したい観点を確認した。社会教育で部落差別をなくす様々な活動があり、それを一つの分科会で交流し、持ち帰り、地元の差別に向きあうヒントにしていきたい。現地テーマにあるように様々な組織が、部落問題をはじめとしたあらゆる人権課題の克服に向け、一体となるために、この分科会では、6つの柱の中でも、特に、討議の柱の③と④を中心に議論し、その中で⑥を明らかにし、そのために①を出しあいたいと提案し、報告討議に入った。

II 報告及び、質疑討論の概要

—報告1—⑦

私自身の体験について

(福岡県同教)

—主な質疑と意見—

協力者 行政の報告として、ポイントは人とのつながりが人を変えていくことが確認できたのではないか。

香川 丸亀市でも研修を行っているが、新規職員は分かったが、ほかの職員以外に対してどのよう

に人権について研修を行っているのか。

報告者 今回の職員の発言はグループ討議の中で出てきた。そこにはほかにも新規職員がいたので、まず行った。全職員向けにも行っている。それは、1回の研修ではなく、3年間のプログラムをつくり、3年かけて学べるようにしている。

香川 丸亀市では、区切らずやっている。3年間のプログラムが終わったあとはどうしているのか。3年の間に新たに入ってくる職員や異動になる職員もいるがそのあたりはどうか。

報告者 3年で終了ではなく、3年区切りで行い、研修は継続している。今回の件を総括し、職員に周知徹底し続けていく。

協力者 部長や、課長など、管理職はどうか

報告者 3か年計画の対象に管理職も入っている。同じく、人権について学べる研修を行っている。

福岡 行政で働いている。平成29年から男女共同参画課に所属している。講師を職員でやっていることがすごいと感じた。研修を行っているが、テーマをどう設定しているのか。毎年変えているのか。規模や範囲によって変えているのか。

報告者 全職員向けについては自分がやっている。自分自身で探している。3年区切りで、その後どうしていくのか、また、6つの人権課題を3年かけてやっていく計画をしている。

福岡 同和問題を研修で扱う時、若い世代には教科書の問題ととらえていて、なかなかピンとこない様子がある。なかなか身近に感じられないと思う。どのように引き寄せていけるか。アドバイスが欲しい。

報告者 事前学習として、基本認識や差別事象の紹介や差別構造、身近にあった出来事などを入れているが、報告で紹介した紙芝居に盛り込まれた思いを、職員が補足し伝わるように考えている。見た後に、わからない言葉を復習してもらい、参加者が紙芝居をつくった高齢者へメッセージを返す場面をつくっている。そこに担当者が返事を書くようにしている。

協力者 行政以外で実践している人からの意見も受けていきたい

大阪 自分自身が同和教育を受ける中で、「なぜ、こんなことをするのか」と疑問に思っていた。子

どものころから、部落差別はおかしいと思っており、教職員として子どもに教えている。「なぜ差別するのか」。報告者はどのように思ってきたのか。はじめは部落を避けてきたのはなぜか。

報告者 知らないうちに刷り込まれていた。いつの間にか避けていた。

大阪 家庭教育や周りの環境の中に部落差別があったのだろうか。

報告者 家庭で話をした記憶はない。そこについてはわからない。

徳島 家庭教育だけでなく、学校での同和教育はどうだったのか。受けた教育が報告者の中に残っていたか。

報告者 世代的にはまちがいなく受けているが、学校で学んだ時の記憶が薄く、それは自分の課題なのか、学校の課題なのか明確ではない。ふり返っていくとそこに課題はあるので、考えていきたい。

協力者 知らぬ間にということがある。どこかで部落差別と出会っているはず。覚えていないこともあるとは思いますが、どのような学習をするかが大切だ。

愛媛 差別事象のきっかけの職員が、直接謝罪をされたとあったが、今また研修を受けて学びなおしているとあったが、どのような研修を受けて変わったのか。今関わっている身近な人に変わらないところがある。また、報告者自身に今でもあると言っていることの具体的な差別意識とは何か。

報告者 関わった職員がいるので語ってもらいたい。日常の中で、判断を誤った時に「それだから差別されるんだ」と、被差別当事者の中に原因を求めてしまう気持ちが生まれる時がある。具体的に何があったというより、揺れているところだ。

福岡 報告者と同じところで働いている。差別発言をした新規職員は高校を卒業したばかり。研修の課題、学校教育の課題、地域の課題など背景から探り、その職員の卒業した学校へも訪問した。本人はよく覚えていたと言っていた。カリキュラムはあるが、きちんとできているか、学校に見直しをお願いした。地域にも入ってもらい、その職員へ特別プログラムをつくり、研修し、ようやく変わった。市民懇談会の実施を行ったり、出か

けて行ったり、様々な人と出会う形での研修を行った。

徳島 人権講師団をつくってやっている。年4回研修を行う。時間外になるので、難しい。さらに、最近、落書きや、問い合わせなど、具体的な差別事象を例にあげて、グループワークをし、ふり返ってもらったときに、大体の方が、差別事象が起こった時に返せない。部落差別を知らない職員が増えている。歴史や部落の起こりから学べるようにしていかないといけない。学んできた記憶がある職員も、昔の知識のままで、新しいことを学ばず、差別はいけないことがわかっていても、返す言葉にならない。ほかの市町村ではどうやっているのか。

大阪 当事者による語りを聴けないものについては語り部さんなどに生き方を語ってもらっている。庁内の当事者に講師をしてもらった。アンケート結果を見ると、反応が良かった。

協力者 ぶつ切りで行うのではなく、系統立てて取り組むことが大切ではないか。学校では時間などの制約があってできないこともあるのではないか。

福岡 課題として系統性がないことがある。しかし、地域に出かけ、出会いや本物に触れることが大切にして取り組んできた。自分自身も高齢者が語ってくれる思いを受け、伝え続けようと思ってやってきた。現場へ行って学ぶことが大事だと感じる。伝わるのは、やはり出会いと感じている。

—報告2—^⑩

琴平町における人権啓発の取組 （香川県同教） —主な質疑と意見—

奈良 PTAの人を巻き込んで取り組んでいることがすばらしい。参加率ですが、それはどの程度の割合のことなのか。

報告者 正確な数値ではないが、幼稚園 15 名程度、小学校 30 名程度。機会はずっとある。

奈良 その中で新しい方がどの程度なのか。

報告者 母がたくさんを占め、父は少ない。初めての方にはチェックを入れてもらっている。

滋賀 学校でPTAの担当をしていた。役員をすることによって、昨年まで考えていなかったことが、今、どうかを聞いていくことをやってみた。部落問題の学習会などの取組を通して、夫との会

話で部落問題に触れることが増えた。という方がいた。夫が知りたくなっていろいろ質問してくるようになったが、なんとか返していたが、その中で、逆差別論の質問に対して返せないことがある。それに対してくやしいという思いを話してくれた。役員をしてくれてよかったと言ってくれた。報告者は人権の担当を経て、どうか。

報告者 今、採用から5年目だが、最初から人権課だった。担当になったときに、考えると学校で同和教育を受けていた。しかし、身近に感じられなかった。出会う機会もなかった。担当になってから、地域の行事や取組に入り、地域の方と出会う、何も変わらないじゃないかと変わってきた。それを自分の身近なところで友人や家族などへ広げていきたい。

兵庫 行政にいろんなことを求めている。と書かれていること、本当にそう思う。しかし、研修を行っても参加がなされない。どうやったら参加者が増えるのか。どうやってどのように参加してもらうか。

滋賀 結婚の相談を受けた。結果的に結婚はしたが、付き合っている時から彼があまり出身について話してくれない。もしかして、部落出身ではないかと思った。彼の父も、彼の生い立ちについて話してくれない。彼女はとうとう彼に迫った。そこから、自分の父から強硬な反対が始まった。わだかまりがある。部落差別に対して返すことができない。返せない自分を不甲斐なく感じ、学びたい、学んでこればよかったと感じ、学びに行った。しかし、強硬な反対をする親の前では、歴史的背景を説明しても力にならない。その反対の背景に差別構造があって、自分がそこに乗っかっていないかを見つめないといけないのではないかと思う。正しい知識が大切。それとスキルの両側面が大切ではないか。

福岡 意識調査、無作為な調査課なのだろうか。

報告者 地域の組織に依頼して行っている。

福岡 ある程度認識ある方々ということか。自分自身も学校教育でPTAにかかわるが、研修会、目的などどこにあるのか。目的は参加ではなく、認識を深めて、差別をなくしていくこと。研修は手段ではないか。研修を目的にするのではなく、やり

方は目的によって変わる。大事なことは、差別をなくすことではないか。

報告者 PTA さんが主導で行っている研修会である。内容については、学校の先生や保護者が集まって考えて決めている。

福岡 市の同和教育研究大会で、どんな課題や意識があるのかを点検し、研修の内容に反映している。そこから PTA や行政に働きかけて、全員参加の形を追求している。

奈良 研修の目的をもつことが最も大切なことである。自分の市でも多様な研修を行っているが、数ではなく、参加者の質であると考えている。テーマを「部落問題」にすると、参加者の数は半分になる。その中で、どんな学びを持って帰ってもらうかのほうが大切ではないか。それでいいと思っている。重要なのは、数ではなく、どんな思いを、誰に持ってもらうかではないか。ビデオは絵空事になってしまう。どうしても出てしまう。だから、当事者を呼んで、正面向いて話し合う形を大事にしていきたいし、大事にしてほしい。

徳島 行政の2本のレポートを聞いて、自分の解放教育の出会いを思い出した。教師になってから出会った豊かな出会い。自分の家を隠していた自分が、解放教育でつながる出会いの中で、隠さなくなった。結婚差別の話があった。説得をできないこともある。けれど、しんどいときに連絡する仲間、自分の居場所。助けてといえる仲間。それが宝となっている。

一日目の総括討論

協力者 個人としての部落問題の出会いや PTA や家庭との連携、学校の取組の課題もある。そこから社会教育の立場から感じている課題、親としての課題など語りあえたらと思う。

香川 琴平町で教員として取組をしているが、地域は非常にあったかい。就学前から高校、行政、運動体でどうやって差別をなくすのかと論議する場がある。どういう方に向けてどういう教材で行うのか。検討している。同じことを別の人が言う。そういう中で、響いていくのではないかな。何も無いときから付き合える関係があって、立場がちがう人の心のあったかさがあってできる。

福岡 中学校で教員をやっている。聞いていて、学校ががんばらないといけないと感じた。部落問

題について子どもたちに正面切ってちゃんと伝えていかないといけない。子どもたちを卒業させた。人権について学びたいといった子どもたち。しかし、学ぶ場があるのか。全人教も教員になってから知った。しかし、現場には意欲がない人がいる。自分も含めて部落問題との出会いの場もなかったんじゃないか。それをどう用意するか。気づかせるか。今回の報告のように、本物と出会う場をしかけていく必要があるのではないかな。どんな学びの場をどう用意するのかを考える必要がある。人権が日常の真ん中にあるまちづくりを進める。人権について考える場が当たり前にあるようにすることが大事ではないかな。

福岡 今までは全人教では、学ぶことが多かったが、ここ数年で質問が言えるようになった。報告者が識字から差別の現実に出会ってきた。差別の現実から深く学ぶということが大切だと思う。大切に続けていきたい。出会っていかないとわからない。差別意識は何も知らないことから生まれる。海外で何も知らないことで怖いと思ったことがあった。それは何も知らない自分の差別意識だった。そこをわかることが知ることだと思う。地元が識字があって当たり前。全国ではそうではないことを知った。差別の現実から深く学ぶことを大切にしていきたい。

福岡 行政で働いている。若いころは教員をしていた。給食費の滞納がたくさんになっていた家庭があった。対応した職員に取組の状況を聞くと、「書類をわたしていたんですけどね」と返ってくる。家庭訪問をしてみて状況を深くつかみ、書類を出すだけではだめだということがわかった。背景を知らないといけない。取組をするときに、顔を浮かべ、取組ができるかどうか。人権の部署だけじゃなくて、すべての職員がいろんなことを考えることができるようになることが大事じゃないかな。

神奈川 教員をやっている。初めて行政の話を聞いて、地元の行政職員を思い浮かべると、ちがいがあってびっくりした。地元ではなかなか行政と話が進まず、限界を感じている。どうやったらこの雰囲気を変えられるか。外国人の方との出会い。困っているが、学齢期を過ぎ、中学校に入れない。

そこで、全人教で、きいた夜間中学校の話から、夜間中学校をつくる運動をはじめている。けれど、厳しい現実がある。今日の報告者から、現実から学ぶ姿を見て学ばせてもらった。

大阪 もともと自分の中に、部落差別をなぜするのかと疑問があった。部落差別を学んできて、ハッとすることがあった。それは、地元がきらいという思いだった。自分の地元の親やおとなの偏見から地元が嫌いになった。今はそんな事実もない。子どもは素直に受け取る自分自身の日々のあり方を見つめないといけなかったと思った。

福岡 運動体として、行政や学校に、願うのは、研修のあり方なども大切だが、部落差別にどこに責任があるのか。子どもにどう伝えていくのか。そこをしっかりとってほしい。そこをつなぐのが、保護者である。学校からの提案からで取り組む方法もある。各地で持って帰って生かしてほしい。

協力者 学校には必ず、子どもがくる。社会教育では人をつなぎ、どう広げていくか。それぞれの課題がちがう中で重ねあう大切なことを確認したい。

愛媛 自校の校長は部落問題について保護者や教員に率直に現実を話してくれる。そこから子どもにどう教育していくか話していく。堂々と部落問題を語れる人になっていくことが必要だと感じる。これまでは、個人や、市民が自分をどう守るかの学習会を考えてきたが、自分のこれまでの経験を学校教育に軸を置いて研修や学習会をやらなくといけなく感じるようになってきた。遠慮せず、部落出身者に話を聞いてきてくれるとよいのではないか。

福岡 学校、行政の啓発も大事。しかし、市民がどう参加し、意識を高めていくかを大切ではないか。意識調査をすると、9割しない、いけないと出るが、関係あるかを聞くと、低くなる。自分と関係ないという意識がなかなかなくなるし、あると進まない。関係あるといける人が増えると進む。行政がリードして市民が参加することが大切で、追求すべきでないか。地域の中の人権意識を高め、その中で部落差別っておかしいと言えるまちをつくる必要がある。一つの取組として、学びの場として質問教室ということで、居場所づく

りをしている。地域の人と一緒に広げていっている。預ける保護者対象に人権研修を行っている。学校や行政の働きかけでは忙しいといい、学びの場に来ない保護者が、子どもを預けているから来てくれる。200人、300人の人が来てくれる。学びの支援から部落問題の学習へつなげていく。そういった活動から広げられるのではないか。

福岡 教員をしている。報告から、70%の人が学んでいるとあり、学校で取り組む大切さを感じる。報告者が学校での部落問題学習をなぜ覚えていないのか。おそらく、届いていない。おもしろくなく、暗い、重いイメージがあるのではないか。教員としては、やってよかったなと思える授業にしていきたい。当事者の思いを聞いて、職員に広げていきたい。

福岡 教員をしている。今の職場で識字生とのつながりがある。そこにあるあたたかさを感じて学び、自分自身の意識が変わってきた。始まりは、前の学校で、同じ学年を組んだ先生に連れられて識字教室へいった。何もわからない中で部落問題と出会い、同じく怒りをもち、差別を許さないという思いが芽生えた。前の学校では家族に話せなかったが、今は自分の家で話せるようになった。母と一緒に学んでくれるようになった。ちっちゃいことからでも、広げていく。そして、一人ひとりのつながりをもとにさらに広げていくことが大切だ。

滋賀 関わっているやんちゃな子ども。聞くと、低学年から落ち着いてきた子ども。校内で人権委員に入っている。学んだことを校内で啓発する際に考える中で、いじめのポスターについて考えた。周りの子どもがいじめはいけないという中で、その子どもはいじめはいけないとわかっていてもいじめてしまう人の気持ちもかんがえようと思った。その子のこれまでを見たとき、言葉の重さを感じた。学校などで、啓発をするとき、差別やいじめは思いやりや心掛けや人への接し方でなくせると考えがちだが、自分史をふり返り、自分自身のいいところ、直したいところを再評価する営みがなくては自分事へはつながらないと思う。

三重 県の状況として以前は教員の研修では、同和問題についてやるが多かった。ここ数年で

変わってきた。学校がさぼっているのではなく、災害、外国籍の子ども、LGBT、キャリア、格差など、扱う人権課題が多岐にわたってきている。結果として、部落問題に取り組む時間が少なくなってきたように感じる。自分自身は家の中で親戚や親から否定的な意見を子ども聞いていた。教員にならなければ、気づけなかった。まだまだ地域によってひどい差別がある。

一日目のまとめ

行政から2本の報告がなされ、特に若い職員、保護者や市民に、どのように参加してもらい、どのような研修を行い、広げるかが議論された。しかし、参加率やアンケートの結果など、数値で図ることも大切だが、差別の現実を踏まえて、生活の中にある差別を見抜き、どんな目的で、どんなねらいをもって伝え、教育や啓発を行っていくかが大事だと共有された。どうやって意識を変えていくか。その一つのキーワードとして、出会いだった。出会いを通して自分事にしていく。課題として、どんな思いをどんな言葉で返していくか。そこについて自分の生活で感じていることを勇気を出して発言してくれた人がいた。まちの人の生活の中にある差別、そこから日常の中で苛まれる意識に寄り添い、課題解決に向けた取組が必要ではないか。差別解消の道筋として、周りにいる人に広げ、自分事としてとらえられるようにしていく。そのためには、必要な出会い。さらに、その出会いの中で、触れた思いから、自己変革していくこと。課題としては、自分の言葉に落とし込むことだった。明日の報告では、具体的なその思いを報告者から受け取っていききたい。そして、どう市民を巻き込んでいくかを学び、今日の学びをつなげていきたい。

—報告3—^①

今が青春 パート2

(和歌山県人教)

—主な質疑や意見—

奈良 夜間中学校に勤めているが、学ぶことの大切さを感じる。しかし、現在の制度では不十分だ。遠いところにいる人は、学びの場にたどり着くことが非常に大変である。広報活動やPRが重要である。和歌山ではどのようにしているのか。また、現場では夜間中学校について知らない、わからない教員が多いと思うが、知ってもらうために、学

校との連携は行っているのか。

神奈川 教員をやっている。個人で学習室をやっていたら、数年前から、日本語教えてほしいという人が出てきた。その中でも、出会った人が、子どもたちが学校で日本語を覚えて帰ってくる。親が日本語を教えてほしいと来ることが増えてきた。「夜間中学校があれば入りたい」と相談に来た方がいた。なぜ、学びたいのかを聞くと、貧しさから、日本語を学び、稼ぎたいといていた。そして、なぜ、ここへ来たのかを聞くと、いろんな人との出会いがあって、行きついたといていた。報告者が自主夜間中学校をはじめた出会いはなにか。

報告者 会館に来ている子どもたちが来てくれることがある。自分の落ち込んでいる時に、夜間中学校に行かないかと誘われ、行って、そこから初めている。

和歌山 教員をやっている。識字学級で学ばせてもらった。報告者と自主夜間中学校をやっている。紙芝居をつくり、平和学習として交流をしたり、識字の話もする。小学校の5年生と識字について交流したりしている。和歌山には自主夜間中学校しかない。20年ほど要望して、ようやく今年、県内4つに正式ではなく、学習の場ができた。高校の教室を借りて開いているが、報告者のように高齢である方や、遠いところに住んでいる人が通えない状況がある。学ぶ場所へたどり着けない。実際につくるにあたって、どこにつくるか課題だ。それ以上に、早くつくらないと高齢になってより難しいと伝えているが、現状、進まない。

熊本 自分の地区にも学びに行けていない93歳の人がある。どうにかできないかと青年たちと取り組んできた。名前も書くことができず、悔しい思いをしていたが、婦人集会の時に、学校にいけないとくやしい思いを語ったときに、小学校の教員がその思いを受け取って支えてくれた。そのことを大会で発表した。自分の名前はこう書くのかと気づいた時のことや、計算ができず損ばかりしていたり、買い物などで困ったりしたことを発信していた。その人を思うと学ぶ場は必要だと思う。

滋賀 母が字をかけずに参観日の日に保護者が名

前を書く際に、代わって書いたことを思い出した。今、自分は隣保館に勤めている。隣保館では識字などを行っているのか。

和歌山 夜間学校のスタッフをやっている。識字については開校してから 40 年になる。児童館で子どもとの交流も含めてやっている。しかし、報告者が起き上がれない状況が起こり、それでも続けていくために、報告者の家に押しかけ、始めたことによって、自主夜間中学校を自宅で行う形になっている。報告者が岩橋に来たときは隣保館はなく、その後、近所の人に識字を誘ってもらい、隣保館に来るようになった。現在、隣保館で、ふるさとフォト教室で地域の写真を取り合い、なぜ、地域のこの写真を撮ったのか、思いを語りあう取組などで隣保館は報告者とかかわりを持っている。

熊本 識字学級にかかわっている。10 数年前に、報告者の識字教室の識字生がバスを貸し切ってうちに来て訪問してきてくれたことを思い出した。あれから、人が少なくなってきた。けれど、報告者の「100 歳まで頑張りたい」の言葉に今日は力強さをとても感じた。励みになった。元気で取り組み続けてほしい。

兵庫 現在、報告の中にあったバングラディッシュの子が通っている公立の夜間学校で担任をしている。通ってくるのに片道 2 時間かけて来られている。そして、その通学には補助がない。毎日通えない。その子が、以前、岩橋の仲間と出会えてうれしかったと言っていた。小学校から学校にいていなかった彼女は、結婚で日本に来たが、今、お金を稼ぐために仕事を増やし、夜間中学校に来れないようになってきている。夜間中学校は増やしていかないといけない。通えるから学べる。少し学び、資格や、学んだから見えてきた物事や社会のおかしさをさらに学び深め考えていきたい。だから高校へ行きたい思いで 2 時間かけてきていた。今、自分自身、夜間中学校を広げる運動を行っている。県下くまなくつくるために、不登校の子どもたちの適応教室を活用できないかなど、いろんな方法を考えている。まだまだ、必要とする方が潜在的に埋もれているのではないかな。また、口コミによってたどり着く人がいる。しか

し、夜間中学校の存在を知らない人もいる。どのように届けたい人へ届けるか。ちょうちん一つつけるだけでも変わっていく。そう願い、取り組み続けたい。

神奈川 団地で子どもの学習室をやっていると、その団地の中で、日本人で字を書けない人がいると聞き、自分の身近に当事者がいたことに衝撃を受けた。その状況を考えて、外国人の多い地域の日本語教室でアンケートをとった。その中で、多くの人の「学校へ行きたい」という回答があり、要望があるんだと感じ、夜中の会をつくり、映画の上映などで訴えてきた。市は夜中をつくると言い、市内の定時制高校の教室を借りて、夜間学校の授業体験会をした。しかし、呼びかけたが、来た人は、場所が遠すぎて通えないようであった。届けたい人へどうやって届けていくのか。少しでもいいものをつくっていききたい。今日の報告をきいて、強いパワーを感じた。周りの人へ働きかけたい。

三重 報告者のパワーを感じた。当たり前の権利が保障されない、頑張らないといけない社会がある。子どもたちのために、おとなが頑張らないといけないと感じた。

—報告 4—②⑩

対話の中で学ぶ場 ～日本語学習広場「かみやん
ど」の歩み～ (滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

愛媛 ブラジルで 3 年間働いていた時があった。現地では大切にされている日系ブラジル人。しかし、日本にやってくると差別の現実がある。文化のちがいをどのように大切にしているのか。

報告者 今、現在、このまちで、外国人の人が住んでいるという事実を前提に、それぞれがもつ文化をそれぞれが大切にするのはなく、もともとあった文化、新たにきた文化それらを「一緒にやっていく」ことで新たなこのまちの文化をつくっていくことが大切ではないかと思っている。

協力者 具体的に新しくなったなと感じる文化はあるか。

報告者 作業所などでは、利用者と外国人の人が、「言葉」というところで共通する悩みを語りあったり、文化交流を行い、かかわりあい、自然に良いところを取りあって、人と人が混ざりあってい

るところが見える。

熊本 運動体でかかわっている。地元では、農村地帯が広がり、農家で結婚して定住する外国からきた方がいる。日本で結婚して、子どもは学校で学んでいくが、母親たちが日本語を習得するのに苦労している。学校からくるプリントや連絡などがわからない。週1回教育会館で仕事のかたわら日本語教室に通っている。大学などと連携し、外国からの留学生などと文化交流をしながらまちづくりをしていく必要性を考えて取り組んでいる。教育の場が大切だと実感する。

滋賀 報告者と関ってきた。日本語教室を立ち上げる中で、文化の違いや言語の違いで悩む方々から「生きづらさ」を感じたことがあった。その当たりを発信してほしい。

報告者 生徒とかかわり、日本人のマジョリティの中でマイノリティとして生きていくしんどさを感じてきた。さらに、自国へ帰るという選択肢がない中で、マイノリティとして生きていくしんどさを感じている。はじめは、「日本はやさしい」と感じていても、言葉を学べば、自分に向けられるまなざしや、言葉の裏にある差別を感じてしんどくなる生徒がいる。しんどくてしんどくて仕方がない。しかし、そのしんどさは、かみやんどに来れば、共有されてわかり合える。ここに来れば、1人ではないと感ずることができている様子がある。親の世代はアイデンティティが確立している。子どもたちを見ていると、ブラジルの言葉は生活の中で使う言語でしか身についていない。そして、日本文化での生活経験は少なくなり、学校で習う日本語と生活が結びつかず、苦しんでいる様子もある。一緒に何かをしながら獲得していかないといけない。文字だけでなく、社会を読む力をつけなくてはならないと感じている。そして、子どもたちは、学校ではおとなしく、いい子として育っている。しかし、いい子のままで義務教育を終えてしまう。だから、学びなおしが必要な状況になってしまう。

協力者 怒りや思いを知ったうえでどう取り組むか。学校との連携でどのように取り組むか。具体的に。

報告者 学校は学校にいただけでは見えない。行

政は地域での姿をすべてとしてしまう。そこがなかなか重ならない

協力者 報告者の具体的な取組や発信は。

報告者 国際協会などで発信してもらうこともある。そこから、県がかみやんどを視察し、驚いて帰っていった。

兵庫 報告にあった「学ばせたいが存在しない。自由な学び」という報告者の観点が支援をともにするスタッフの中で共有されているのか。滋賀県の夜間中学校の状況はどうか。

神奈川 外国人の子どもの学習支援を立ち上げてかかわっていた。そこで、見えてきたのは、外国にルーツある子どもが荒れて、まず、日本人の子どもを叩くことが見られることがある。もしくは、学習に打ち込み、ひたすら学力の向上をめざす。また別の状況では不登校になるなどを見てきた。もしくは、小学校最初の1か月でいなくなる。自分がかかわって、いかに外国人の子どもたちの気持ちを知らないかを突きつけられてきた。学校という枠を出て考えることが必要だと思う。しかし、どうやって出るか。また、市では外国の子どもやいろんな人に文化交流の場をもっているが、学校と地域の間に壁を感じる。学校は学校でやり、ボランティアはボランティアでやってしまう。どうやってうめていくか。

報告者 現在のスタッフはかみやんどの立ち上げからかかわっている人や、運動体や夜間高校を経た教員なので、共有できている。熱意がある教員は動く。

協力者 少人数であることを生かしている。拡大していくとどう共有するかが課題となる。県内の夜間中学校の動きはどうか。

報告者 県は不登校などの課題から、学びなおす場がないことに課題を感じて動き出している。

協力者 教育現場で外国のルーツがなかなか結び付かない課題がある。報告者のところではどうか。

報告者 教職員の熱意によってかかわりがちがう。日本語教室に任せたらよいと考えたり、日本語加配をつければ、外国の子どもの担当のような自覚が芽生え、担任とその子の距離を開けることにつながってしまっている。

滋賀 その人が学びたいことを学べるというところがよい。対等で柔軟な関係をどのように築いていくか。今、多文化交流教室で、出会う人とかかわり、日本の学校で母語を失う自分の子どもを見て、せつなさを感じる保護者がいる。学校は国際化、多文化共生と言いながら、実際はそうっていない。とその人の言葉から感じる。外国のルーツをそぎ落としてしまうことにつながらないか。「ハーフ」ではなく「ダブル」なんだという言葉にある思いをもって取り組まないといけない。

滋賀 隣保館で活動している。報告者と人権センターで活動していたこともあった。そこで通ってきている外国の子どもの話を聞いていくと、学校が取り組んでいる朝の読書の時間には、どんな本を読めばいいかわからないので、読んだふりをしてやり過ごしていると言っていた。授業では、わからないことがあったり、時間がかかったりして、恥ずかしく、質問することに気がひけてしまう。英語は一番苦しく、日本語を介して学ぶから本当にわからない。その子と人権作文を書く際に困ったことを聞くと、弁当で困った話が出てきた。また、まちでの保護者のコミュニケーションの取り方や、風呂などの生活文化が嫌だったと出てきた。そこには、子どもたちが、日本の文化の価値観にはまっていつているのではないかと感じた。アイデンティティをはぎ落してしまっているのではないかと感じる。学校園所に悪気はない。しかし、日本文化の中に入れ込んでいないか。入りやすいところはどこか見つけ直す必要がある。人権センターが誰でも入りやすい雰囲気だった。だから、来れたのではないか。現在、人権センターがつぶれ移転したことで来にくくなっている。どうやって来てもらうかが大切だ。

大阪 教職7年目のころ、夜間中学校へ見に行って、昼にはない生徒の意欲があって感動した。生徒たちの学びへの飢えや、そこの教員が競争はないという言葉、そして生徒が言う文字は力だという言葉に、差別に対して向きあう強い思いを感じた。学びの保障、そして、その整備をする運動は、当事者だけでなく、教職員である自分自身がどういう動きをするかだと感じた。しかし、それ以上に、学びなおしをすることを前提にするのではな

く、まず、今のめのまえにいる子どもの学力をどう保障するか。学校の中をどうしていくかだと強く感じた。

兵庫 あまり知られていないが、夜間中学校でも、学齢期の子どもを受け入れることができる。全国では生徒はいない。そこには、そもそも、学校がやるべきことをやらねばならないということを前提にしているからだと理解していく必要がある。

—報告5—②①

誰もが働きやすく、活力あふれる職場づくり

(三重県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 会社は忙しい状況があると思うが、人権研修をどのような形で行ったのか。

熊本 自分は教員になる前企業に勤めていた。人権を何と位置づけ、具体的に何を指すものとしているのか

熊本 人権大学講座の講師はどんな人で、どんな人権課題を扱っているのか。

報告者 基本的に勤務時間内に行っている。昇格や昇進のタイミングで、受ける研修の中に短い時間ではあるが、人権について学ぶ機会を入れている。日々の中での研修は、業務の隙間での研修であるため、個別の人権課題を取り上げるより、社員のアンテナを伸ばすような行い、自分自身が自分の生活と結び付けてアンテナを高くできている実感がある。だからこそ、私生活の中で、気づける種みたいなものを与えられるように考えて行っている。子どもに関する問題や、女性の権利、ハラスメントなどを中心に、自分にどれか身近に感じるかを投げかけながら行っている。10年ほど前から、企業として三重県の人権大学に人材を派遣している。そこを出た人材が管理職や人事部門に在籍して社内で研修を行っている。

協力者 三重県では、人権センターの中にある反差別人権研究所で人権講座を受講する形をとっている。そこで、学んだ人が各企業でそれぞれに人権研修を開き、広げるような仕組みがある。講師は有名な方や、FW などを行ったりし、自分自身の意識を見直し、捉えなおしていく内容になっている。

滋賀 報告者が、人権問題について、自分事とし

て捉えている。そうなれたのはなぜか。どんなことを考えたのか。また、研修を通しての社員や雰囲気など、変容はあったか。

三重 企業として、人事として採用や面接などで過去に差別の問題に出会ったことはないか。また、報告では、友人との出会いを語っていたが、学生時代の人権学習の印象は残っているのか。そして、入社して、人事部の先輩や周りの人とのやりとりの中で差別の現実を感じたことがあるか。

福岡 報告の中にあった課題の対応をどうしているのか。

報告者 友人からカミングアウトされたことを、企業で学ぶ際に思い出した。その当時の自分自身は「言わなくてもよかったのに」と思ったことをふり返り、自分自身が差別者だったと振り返れた。隠さずにいたかったと言う友人に対して、「ありがとう」と言いながら、心の中に焦りがあった。それまでに自分がセクシャルマイノリティを理解しない発言もしてきたのでないかと考えた。知識がなく、その場しのぎでしか返せなかった自分がいやだと思った。社員については少しずつ変化している。まだまだ、総じて変化は見えづらいが。アンケートをとった結果から、職場の社員同士の関係に課題があるのではないかと、気づく社員もいる。学生時代、自分自身は人権教育を受けた記憶がない。しかし、人権とイメージできるのが、障害、在日外国人、平和であるから、学んできたと思う。おとなになって振り返れば足りていないと思う。

三重 報告者と勤務している。20年間働いてきたが、就職試験における差別はやってきていない。面接する側には、聞いてはいけないことや、人事部以外の社員もいれながら研修を行っている。人事に関することで差別はないと自信をもって言える。しかし、社内での相談を受ける中では、ハラスメントについては感じることもある。確実にヒアリングを行っている。その中で感じる原因にあるのは、「自分たちはこう育ってきた」というものが多い。特に、上司、部下の関係性によって起こることが多い。管理監督者に対するハラスメントについての研修を行っている。

三重 自分自身は同和問題は「逃げること」「隠す

こと」と教えられたことがある。隠す、逃げるで、結果として企業としてつぶれるときがある。そう考えると、企業として発展するために、正しく人権を学ぶことはかかわっている。

滋賀 70回大会では、滋賀から企業から発信してもらった。取組のきっかけや変容、とまどいを報告してもらった。Aさんがでてきたレポートだった。Aさんが感じていた、会社で言えない雰囲気。自分は外から見ていたのではないかという気づきから、だれでも働ける場をつくるための人事担当としての取組が発信された。成果は数字ではなく、現実という部分を見ていくことが働ける場をつくるのではないかと。それが具体的な差別問題を解決していくものになっていくのではないかと。

協力者 報告者の中で、取組やレポートを書く中でのとまどいはどうだったのか。

報告者 社内は、人権について、頭ではわかっている、大切さや取組まなければならないことはわかっているが、具体的にどう捉えていくかがわからないことがあったり、具体的な行動が取れなかったりする状況があると思ってきた。だから、今、動けば状況が変えられる立場にいると思う。担当になってから、葛藤しながら、動いてみようともがいたと思う。

三重 学生時代の友人との今の付き合いはどうか。研修をとおしてあった自分自身の変化をどう広げているのか。

報告者 今、友人と近くに住んでいないが、会った際に、自分が勉強していることを伝えた。友人は、社会の中に関心をもって勉強している人があるんだと驚いていた。友人は「自分は自分でいいんだ」と捉えて、自分のコミュニティへ働きかけしている。会社の中でまだまだ自分の変容は語れていない。それは今後の研修の中で取り組んでいきたい。

2日目の総括討議

福岡 識字の報告を聞いて、もう一度識字を勉強しようと思った。地域の中で一番重いものを抱えている。当事者の持つ、その思いをどれほどくみ取って広げていくのか。地域に出て生活を出しあいながら学ぶことが大切だ。

三重 多方面での報告が重なったときに人権確立のまちづくりが見えてくると感じた。地域に学

ぶことが大事だと思う。企業が人権を大切にしているということを学校などに発信しているのか。具体的に広げているのか。

三重 学校との接続は採用という面でしか接続することがない。社内には向かっていくが、外へ貢献するということにまだ立てていないのが、課題だ。今後は地域貢献も何か考えていきたい。採用 PR として人権の取組を発信していくことも必要なのかもしれない。特に、人権の安心感を伝えられれば。

三重 人権企業連絡会を通して、行政も、連携して講師に来てもらったり、講師に派遣したりしている。

協力者 企業の中でも人権にかかわる取組は以前より進み、SDGs など、人権を取巻く状況も変化してきている。

三重 教員だが、30 年を迎える識字学級にかかわり、ともに活動している。識字生の「私たちから字を奪ったのは先生です」という言葉。今、教職員として奪う側から、取り戻す側になってきた。高齢化の中で、昼の識字教室に変え、取り組み続けている。中学生に「勉強することがなんて幸せか」と伝えている。今日、識字の報告を聞きに来た。岩橋の取組から自分のかかわる識字学級は思いを絵本で形にしようと思い組み組んできた。今後も同じ識字の仲間として頑張っていきたい。

三重 高校で教職員をしている。自分も企業で働いていた。あまり意識をしていない企業だったが、いろんな人と働いていた。学校に入り、教職員として人権を大事にした教育をやろうと思うが、飛び出したことをやれない雰囲気を感じて取り組めないでいる。けれど、今ある教職員のサークル活動の中心に人権をもたせてやっていきたい。

奈良 夜間中学校で働いている。外国籍の生徒のほとんどが働いている。その働き方も心配になるような状況がある。そして、若い生徒は、少し学ぶことで少し身に付き、出席率が落ちる。日本語が少しわかると労働の場ではできることが増え、仕事が増えていき、収入が増えて、来なくなる。まだまだ学ばないといけないことがあるのに。市内の日本語教室で共通する課題。企業とつながっていきながらやれることがあるのではないかと

思った。夜間中学校は県外からの受入れができない仕組みがある。しかし、夜間中学校の数も少ない中、引越してでも学びたいと思う人たちがいる。公立としてのメリットをいろんなところへ発信していくことで、取り組んでいきたい。

協力者 夜間中学校など、通えない人がいる状況をどうするか。課題があるからこそ取り組まないといけない。企業としても人権を語らないとまらない。外国人労働者が増える中で、識字の課題も様々になってきている。

滋賀 教員をやっている。識字でつながる人を見て、人権を学ぶことの豊かさが再確認できた。日本語教室で生徒と関わる中で大事にしているのは、どうして学びたいのか。「学びたい」の奥に生活がある。それがわかると、受け取る側が変わってくる。発達障害がある子どもについて、学校で、支援担任である自分に、「こんなことがあって困っている」と言われる。本当にその子が学びたいことは何なのか。本当に学ぶべきことは何かを見出していきたい。企業の報告を聞いて、ダイバーシティ、インクルージョンの考え方は、外国人労働者が増えている中で壁と隔たりを取り払う、必要なものだと思う。それらは、全人教で交流している人権の学びを大切にすることでできるのではないかな。識字学級で学びあっていることを大切にしていることが、必要ではないか。人権を大切にしたい学びが、識字から企業までつながるものではないか。

三重 教員をやっているが、人権について、おとなになって学び直さないといけないということを聞いて、心苦しく思った。自分自身が学び続けて人権意識を高めていかないといけない。

三重 地域、学校、企業それぞれの取組がある。つながっていると思ったのは、今いる立ち位置にどんな差別の現実があるのか。そこに気づかないことを前提にしないと取り組めない。困っている人や差別の現実が見えるからこそ取り組める。誰のためにやるのかを考えるから取り組めると確認できた。

愛媛 20 年ぶりに全人教大会に参加した。部落解放なくして労働者の解放はなし、労働者の解放なくして部落の解放なしという言葉を中心に

きた。狭山のことについて運動をしている。思いをつなぎたい。

滋賀 全人教に来ている学校の教職員は意識が高い。その中で、学校の中での研修はどうか。意外と学校はできていないのではないかな。子どもを置いて研修に行くことや、多忙の中でできてないこともある。できていない中で、職員同士のいじめなどにもつながっているのではないかな。

徳島 学校は大会などの大きなことがあり、必要な時には研修を行うように感じる。そうでなく、本当に必要だと感じて日常においてやっていく。自分自身、人とつながりながらやっていきたい。

福岡 報告者の企業で 7000 人規模の従業員にどう研修しているのか。

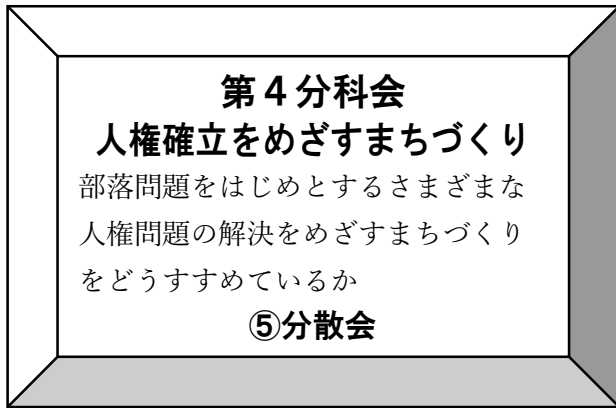
三重 毎年行うのでなく、区切りで取り組んでいる。人権週間に合わせてインターネット上で啓発したり、ポスターなどを使って、広げたりするようにしたりしている。

大阪 教員をしている。学校の状況が変化し、やらなければならないことや、数字での結果が求められ、学力競争があおられ、その責任が教員の資質に求められ、生まれるしんどさが、弱いところへ向かい、自己責任の価値観が広がっている。社会の構造として弱いところにそのひずみが集中していると感じる。子どもや教員ではなく、構造に原因がある。しかし、学校の中にいると、それが当たり前になる怖さがある。経験の浅い教員は当たり前になりつつある。人権学習をいろんなところでできるまちづくりではなく、差別をなくしていけるまちづくりとして捉えていけないといけない。おかしさを放っておかないまちづくり、みんなが自分事と捉えてまちづくりに入っていくようなことをしていく。自分は何ができるか。今まで大事にしてきた人権教育を後退させない思いだ。地域やいろんな人とつながり、子どもたちに、豊かな出会いをコーディネートしたり、この場に新たな教員を連れてきたりしている。人権に取り組む人のつながりを広げることだ。

2 日間のまとめ

地域のあり方が考えあわれた。差別の現実から深く学ぶと言われるが、実態把握をどうするのか。定性的、定量的なもの。アンケートも一つの方法だ。しかし、数ではなく、人の一生の中でポロッ

と漏らすつぶやきのその一つから差別の実態が表れているのではないかな。それは出かけていけないといけな。学校では、子どもたちが十分に学べずに放り出され、社会の中で差別に合うことがある。それが、学びなおしの場で見えてくることもある。学校では学べなかったそんな思いを持っている人たちの姿も報告されてきた。学校は子どもたちの学習権をいかに保障するか。しかし、学校教育がブラック企業とされる中で、社会教育の在り方もまた、模索していかないといけない。人生の長い学びを社会教育の中で受け止めていくのか。差別をなくす取組。それは、数字の中からは見えてこないものがある。具体的に会った A さん、B さん、あの人がこんな課題を持っているところから取組をつくる。取組が形骸化し、空洞化することに対する点検を行い、取組の大小に様々な状況を踏まえ、次へどうつないでいくのか。そのために、一緒に取り組む仲間が大切だと確認された。解放への取組。差別をなくす取組は一日ではない。揺れたり、立ち止まったりすることもある。そのとき仲間が大切だ。二日間のキーワードは出会い。しかし、出会わせても即、豊かな出会いにはならない。差別事象も起こるだろう。しかし、そこから論議し、差別をなくしていくきっかけにしていくことが出来るのではないだろうか。差別に苦しんでいる人は命を懸けて苦しんでいる。ならば、差別をなくす取組にともに命を懸けてもよいのではないかな。そういった覚悟はあるのか。一緒に思わないか。差別の当事者は誰か。それは、差別にかかわるすべての人ではないか。そう考えると、すべての人ではないか。そんなことが確認されたのではないかな。自分自身は社会の差別意識の中で育った。しかし、出会いの中で、実際の問題として自分に何ができるか。人権教育を学びなおし、変革してきた。今から、具体的に実際の問題として、差別をなくす道へ歩み進めていこう。



I はじめに

まちの人々が相談できる場所があるか、居場所があるか、役割があるか、出番があるか、認められているか、という点を含めて討議をおこなってきたい。

II 報告および質疑討論の概要

ー報告1ー②④

更池識字学校の50年～「学ぶ」ことは「生きる」こと、「生きる」ことは「学ぶ」こと～

(大阪府人連)

ー主な質疑と意見ー

高知 この報告原稿以外にも話し足りない部分や補足があれば、聞かせて欲しい。

報告者B 最初は識字に行くのに躊躇していたが、今は楽しみに。勉強ばかりでなく、お茶飲みながらいろんな話もする。それも楽しみ。

大阪 報告者はテレビで夜間中学校を知り7年間通う。その後、更池の識字学校へ。10年間少しずつ書き取り、生い立ちを「柿の木からきた道」という紙芝居を作成した。

熊本 私たちの支部にも、報告者と同じような経験をしているおばあちゃんがいた。52歳まで自分の名前が書けなかった。バスにも乗れない。計算ができない。病院で名前を書かないといけなからそれが困った。その後、その識字生の生い立ちを教材化した。

大阪 子どもを奪われた(引き離された)のはいつですか？

報告者A 子どもが1歳3か月です。

大阪 1年3カ月で別れたら、小さい子どもは、身に覚えのない人がきたら、怖がって近づいたら「おばちゃんきらい」と言ったのかもしれないのでは。

徳島 小学6年生で識字の勉強をしました。識字

について学習した子どもたちに何かメッセージがあればお願いします。

報告者B 差別は人を殺す。人の命を奪う。そこを生き抜く力をつけて欲しい。教室に部落の子どもたちがいるのだったら、周りの子たちががんばらないといけない。まずは先生が自分の後ろ姿を見せないといけない。先生である前に、子どもの気持ちわかる、相手の気持ちわかる人間であって欲しい。

報告者A 私は読むことも、計算もできなかった。何度もできないからやめようと、文句ばかり。最初は小さな数字、次は大きな数字の足し算ができるようになってうれしくなって。次は書き順のつらさに、困っています。それでも、このごろは、いまは楽しく勉強を教えてもらっています。

大阪 識字に行くようになり教師としての一番大事ところを識字にきて教えてもらっている。識字との出会い、部落問題との出会い、それを次の若い世代につむいでいってもらっている。

三重 私たちの「しらさぎ識字学級」は30年を迎えた。更池識字学級が50年も続いた秘訣を教えて欲しい。

報告者 50年だけど途中、途切れた時期もあった。勉強ばかりでなく、「ほっと」する場であることが大事。先生、識字で勉強教えてなくていい。人生の勉強をしにきて欲しい。それが長続きする秘訣。「先生、スーツでこんでいいねん。ジャージで識字にきて」

福岡 京町の識字は57年めで、現在80人。担当者が地区の識字生に家庭訪問して、識字プリントを作成し出かけて「届ける識字」をやっている。

高知 私たちの識字も50年。高知県内では7～8の識字に減ってきてが、2年後に県が夜間中学校を作ることになった。それをきっかけにがんばっていききたい。

ー報告2ー②⑥

木島平村雪ん子人権子ども会の取り組みから～
村内小中学校の全児童・生徒が会員～

(長野県同教)

ー主な質疑と意見ー

高知 村内すべての小中学生が子ども会へ加入しているが、本人の意思で全員が加入しているのか？申し込み方法などはどうやっているのか。

報告者 以前の解放子ども会の中には子どもの意思、保護者も了解して参加していた。人権子ども会は児童会・生徒会活動の人権委員などの代表8名(小6、中3)が「推進員」として参加している。

熊本 参加させている保護者の思いや、保護者同士のつながりなどはあるのか。

報告者 保護者は積極的に子どもを送り出してくれている。差別をなくす村民大会は保護者の参加は条件として、子どもたちの発表を聞いてもらっている。保護者同士のつながりについては、解放子ども会の際は懇親会や保護者会もあったが、人権子ども会ではそのような場は持っていない。

三重 子ども会活動を続けていくなかで、部落差別意識の解消に向けて何が前進して、何が課題なのか聞かせて欲しい。

福岡 部落問題についての保護者の意識、学校現場との連携などについて教えてほしい。

報告者 部落問題の保護者啓発としては村内全26地区をまわって住民啓発をおこなっており、保護者も参加し一緒に話し合いをしている。学校との連携として、小中学校9年間を通して、部落問題学習の計画を立てて取り組んでいる。高校の方へは、自分が入って、職員研修などをおこなうようにしている。

三重 「伊賀町部落問題を考える保護者のつどい」をおこなっている。子どもたちが小さい頃から部落問題について考える機会を続けている。子どもの頃に部落問題学習を受けてきた世代が親になっている。それがつなげていきたい。

熊本 私の小学校も全校240人が解放子ども会に参加していた。小学校4年生のときに不登校だった女の子が、5年生になったら学校にくるようになった。そこに解放子ども会の存在があった。「おかしいことは、おかしいと声をあげなければ、差別はなくなるらない」、解放運動のおっちゃんの姿に子どもたち学び、学校生活でも子どもたちが声をあげるように変わった。

一日目 総括討論

三重 木島平村人権子ども会は関係者に同宗連関係の方は入っていないのか？この分科会は「人権のまちづくり」であり、地域における寺院・宗教者の役割は大変大きいから。

報告者 人権の子ども会の運営には入っていない。

い。

徳島 人権子ども会の存在意義、学校の人権教育と子ども会のすみわけについて教えてほしい。

報告者 子ども会の一番の存在意義は部落の子どもたちに差別に負けない力をつけること、部落の子どもたちを支えることが目的。学校でも人権教育をしているが時間的・場所的な部分に限界があり、子ども会ではそこをもっと充実した取組ができるから。

—報告3—②

差別落書きと向き合って～人権文化あふれる心豊かな社会をめざして (福岡県同教)

—主な質疑と意見—

大阪 自分のムラでもかつて差別落書きがあった。涙がとまらなかった。差別落書きに抗議して発表した子どもたちはすごいと思った。それを指導してきた先生たちもすごい。これからがんばっていきましょう。

福岡 今回の差別落書きが起きた中学校に勤務しており、解放子ども会で支部の子どもたちと関わってきた。子ども祭りで差別落書きの事を訴えることに、最初はすごく躊躇し葛藤していた。友だちや知り合いもたくさん参加しており、立場宣言にもなるから。その時にハッとした。子どもたちに安心して発信できる環境や仲間を私たちがつくっていなかったと反省した。中学校としても今回の事件を教材化し、学校でもしっかりと部落問題学習をやっていこうと取り組んでいる。

福岡 差別落書きがあったとき、教職員がムラの子も子どもたちにどのような関わり方をしたのか、解放子で子ども会にきてない子どもや地区外の子どもへはどう説明したのか教えてほしい。

報告者 毎週一回、隣保館と学校と連絡会を持っており、一週間の子どもたちの様子について話し合っている。差別落書きがあったときも地域と学校がしっかりと子どもや保護者と関わってきた。解放子ども会はムラの子は全員参加している。地区外の子も子どもたちには、これから差別落書きの事を教材化して伝えていこうと取り組んでいる。

福岡 差別落書きがあった小学校に勤めている。小学校では全校児童には差別落書きがあったとは伝えていない。6年生の人権学習では賤称語なども学習するので、事前に保護者たちと話しな

がら丁寧に学習を進めてきた。保護者には市内全戸配布の啓発冊子に差別落書きが掲載されていたので、それを使って、保護者啓発をおこなってきた。

福岡 どこまで今の子どもたちに差別落書きや差別の現実を教えていけばいいのか。子どもの様子もふくめて教えてほしい。

報告者 ほんとに子どもたちは傷つきます。また書かれた、子どもたちはがんばれるのか。でも、差別はなくせる。許さない、差別をなくしていこうという大人やみんなの姿をしっかりと見せていくことが大事。それが安心できる環境をつくることが大事。

福岡 地元の中学校の教員です。中学生たち、ほんと、心、おれそうになっていました。仲間と先生たちも一緒にやっていく。いろいろ悩んでいたけど、最終的には子どもたちは発表するようになった。

徳島 差別落書きを受け、市の行政職員がどう受け止めて、部落差別解消にどう取り組もうとしているのか教えてほしい。

報告者 市の全部課長が差別落書きの現場を見て現地研修をおこない、各部署にかえて管理職が人権研修を実施。市の行政職員研修では最初の20分は必ず同和問題、今回の差別落書きのことも含めて研修を実施している。

福岡 地元の副支部長をやっている。あえて差別落書きを消さずに取組をすすめてきた。自分たちの家に刻まれたその差別落書きを睨みつけながら生きようという思い。どこまで差別の現実を伝えるのかとの質問があった。差別落書きの話をしたら子どもたちは傷つく。でも、「エタ」という言葉で傷けたら「エタ」という言葉で元気出させないといけない。水平社宣言の「吾々が誇りうるときが来たのだ」という意味が子どもたちに、少しでも分かってほしい。私たち親が子どもたちを守る姿を見せないといけない。その姿を見て、先生や行政の人たちが考えてほしかった。

—報告4—②⑤

「私の中に潜んでいたもの」 (三重県人教)
—主な質疑と意見—

愛媛 部落差別を残してきた大きな要因として、お寺が果たしてきた部分も大きい。同和問題に取

り組む宗教者連帯会議の活動内容を教えて欲しい。昔ながらの差別的な迷信や風習などに対してはどう考えているのか？

報告者 私たちの教団での取組としては十分ではないが、この間、性差別、人間の尊厳、身元調査、ヘイトスピーチ、ハンセン病問題などについての研修をおこなってきた。三重同宗連では四日市市の仏教会が30年前に死はケガレではないとして、清め塩をなくそうと取り組んで、三重県内では広がり、キヨメ塩はなくなってきた。

愛媛 真宗高田派での過去帳、法名の調査結果では、差別記載はなかったというが、各住職の自己申告なら、差別的記載があっても「なし」と報告されているのではないかな？

報告者 身元調査規制・個人情報保護のために過去帳は他人に見せてはいけなと指導を徹底してきた。そのため調査といえども他の寺の過去帳は見せてもらうことができないという問題があり、各寺に確認してもっての点検になった。

福岡 差別法名の有無と過去帳の差別記載調査で600以上近くある寺院を点検して、差別記載が「ゼロ」だったのはなぜか。あえて、高田派ではそのような差別記載をしてはいけななどの徹底や指導が昔からあったのか。推測でもいいので、教えてほしい。

報告者 具体的な差別的な文字を例示して点検してもらったがなかった。墓石についても、個人情報保護の関係で、各寺院の住職にやってもらった。

愛媛 差別戒名や人権問題については仏教界あげての取組なのか？

報告者 同宗連は仏教界だけでなく日本の宗教界あげてとりくむ組織である。浄土真宗東西10派でも取り組んでいる。全国的には60教団が加盟して同宗連で活動している。神社本庁、キリスト教団なども入っており、牧師や神主、仏教者などと共にやっている。

三重 三重同宗連には伊勢神宮は入っているのか？

報告者 全国同宗連には神社庁は入っているので、伊勢神宮も入っている。三重同宗連に伊勢神宮が入っているかは、いま、ちょっとわからない。

—報告5—②

「和太鼓とともに」 (高知県人教)
—主な質疑と意見—

大阪 以前、中学校で解放子ども会の子たちと太鼓をやっていた。卒業後も太鼓をしたいと言っていてくれて、太鼓集団を立ち上げ23年目になる。現在は生涯学習事業の一環としてやっているが、人数が増えるとうとう太鼓の数が必要になる。一台70万円くらいかかる太鼓をどうやって増やしていったのか。経済的な支援・基盤はどうしているのか？

高知 報告者の地元青年団で太鼓をやっているものです。太鼓の数のことだが1998年に同和教育課が太鼓を10台そろえてくれた。その後、自分たちでは買えないので宝くじの助成金を使わせてもらい6台増やした。当初は6名だったが、青年だけで11名になり、さらに小学生や幼稚園の年長さんも参加して増えてきた。現在は地元の太鼓屋さんから太鼓を借り、隣の被差別部落からも太鼓を借りてやっている。今年度も宝くじの助成金を申請したので、また太鼓を購入したい。自分たちのポケットマネーで太鼓を購入しているわけでない。

大分 太鼓をたたいてる姿を見たら、小さい子どもから青年、先生までいて、みんな輝いていた。私も一緒に太鼓をたたきたいと思った。私の子どものころは、「勉強しなさい」と友だちを蹴落としてがんばってきた。勉強では人間関係などが「つながり」がづくりにくかった。青年団の人たちの姿を見て、すごくうらやましく、大事だなと思った。

大阪 うちの地域でしかうたわれてない盆踊りがある。それが消えかけていた。年配の人がやっていたが、それを若者たちに引き継いでもらおうと、子どもたちに盆踊りの太鼓と歌を呼びかけた。太鼓と歌とお囃子の3つを同時なので、子どもたちにとっては大変。ありがたいことに保育所の夕べのつどいや地域の納涼祭、中学校区のフェスタ、支部50周年のイベントにも出演させてもらっている。参加している中学生なども厳しい家庭環境の子どもたちもいるが、みんなで一つのものを作り上げていくなかで、子どもたちが変わってきている。

福岡 地元の学校の人権学習との連携や協力などを教えて欲しい。

高知 地元の小学校の教員です。青年団が太鼓をはじめた頃は小学校とのつながりはなかった。現在は4年生で地域に残る伝統産業やお祭りの学習のなかで太鼓を入れた。6年生の地域学習の時間に青年団の活動について深く学ぶという学習をしている。小学2年生まで学校に行けなかった部落の子どもが、青年団の人たちと太鼓や地域の活動に取り組むなかで、だんだんと前を向いて、変わってきた。4年生の学習発表の場で率先して太鼓をやって、みんなから認められていくなかで、自信をつけて変わってきた。「この町が好き」というようになってきている。親や教員以外で頼れる場所をつくりたい。だから、そこにつなげる仕組みをつくりたい。

高知 青年団では太鼓以外にどんな活動をしているのか。

報告者 地元の小学生に地元の講話をしている。私のムラは地区改良事業の関係で市営住宅9割、空いた土地に公園が多い。どうして公園が多いのかなども話している。地域のイベントの運営、出店をして青年団の活動資金にしている。地域の川の清掃を毎週1回している。子ども会にもかかわっている。青年団主催でイベントを行うと、体育館にイルミネーションをしている。ボランティアの域を超えて「地域のプロフェッショナル」みたいになっています。

福岡 自分は小学校の教員をしている。自分の学校でも急に学校に行きたくないと言って長欠になる子どもがいる。その子は新学期、忘れ物をしたことを担任に厳しく指導されたことで、学校に行けなくなっていた。数日間しか1年間、学校にいけなかった。担任も自分は間違っていないと家庭訪問などもおこなわなかった。その子が6年生になって、担任も変わり、同和教育担当なども熱心に関わるなかで変わっていた。勉強させなくてはいけないと教師は思っているが、反省している。教員の自己満足になっていないかと問い返すことが大事。

総括討論

協力者 この分科会では「顔が見える」「相談できる相手がいる」「居場所がある」、そんな「人権の

まちづくり」をテーマの柱にして討議をすすめてきた。総括討論でも活発的な討論をしてほしい。

三重 小学校に勤めている。地区学で地域の子どもたちに関わっている。南国市の太鼓の話を聞きながら、自分も太鼓をしていて、イベントに子どもたちを参加させるだけでなく、子どもたち自身でイベントをやっていく取組をしていきたいと思った。宗教と部落差別の報告を聞きながら、自分が小さい頃、共同墓地に部落の人の墓だけ、端の方の小さな所に分けられていた。今、思うとそこにも部落差別の現実があった。

三重 宗教が差別に加担してきた役割、歴史は大きい。だからこそ、私は同宗連と全人教がもっと連携して、一緒になって差別をなくす取組、地域での人権教育にもっと取り組んでほしい。

大阪 昨日からの熱い報告を聞きながら、考えさせられることが多かった。子どもたちも識字や地域の方の話を聞く中で、自分のなかに当たり前と思っていたことなどを見つめ直してきた。初任者のときに、子ども会で自分自身が子どもたちに何を語れるのだろうかと思っていた。その時、先輩から、「自分で考えないで誰が語れるのか」と言われた。この年になって、社会の理不尽やいろんな事を考えられるようになって、子どもたちに伝えられるようになってきた。

高知 以前は県などが部落問題の映像などを作成し、テレビでも放送していた。高知でも啓発映画を作ったことがあった。以前も長野県で結婚差別をテーマにしたいい作品を作っていたが、現在の長野県の実情を教えて欲しい。

長野 以前は長野県同和教育推進協議会が作っていたが、この数年は作っていない。ドキュメンタリー「結婚」などがある。事務局のスタッフも変わっていくなかで、当時の映画に出演していた当事者とその後、つながっていっていない。それが課題だと思っており、今後、しっかりとつながりをつくっていききたい。

大阪 現在、私の勤めている中学校は、長年、学校が荒れていた。学校が荒れるパターンが決まっていた。秋の体育大会が終わり、進路に向かうときに、進路に展望を持たない子たちがあれていた。昨年度、識字に関わってきた先生が、学力につい

てきちんとと向き合わせたいと、中2の終わりに初めて識字学校に見学に行った。そこで、識字学級生たちから、しんどい子たちに、話をしてもらった。一緒に一生懸命、計算ドリルをやっている識字生の姿をみてきた。中3の秋、識字生に学校にも来てもらって講演してもらい、学年が荒れずに卒業していった。高校受験失敗した子もいたが、最後の最後まで諦めずに受験をして高校に入学した。いつもならあきらめるしんどい子が、ふんばれた。識字学校との学習があったから。今、識字学校発信で松原市内の中学生がエンパワーされている。識字生の学びの姿を見せてもらいながら、中学生が「学び直しの意味」を問い直し、子どもたちがエンパワーされている。

大阪（報告者） 私が子どもたちに話をしたら子どもたちが変わったんじゃない。先生たちが熱意をもって子どもたちと向き合ったから、子どもたちが変わったんやと思う。私ら教師になろうと思ってもなれなかった。先生、子どもが好きで教師になったんだから、まっとうしてください。

兵庫 私は宝塚市の識字学級生です。45年前、なぜ、識字教室で学んでいるのか、地域内で話して欲しいと頼まれたことがある。その理由は、私自身、読み書きができないから識字学級に来ていると話した。質疑応答で、若いお母さんが「そんなこと言うから差別を受けるんや。読み書きができないことなど言わないで」「私は、読み書きができます。お父さん、お母さん、おじさん、おばさん、子どもたちもみんな読み書きができます」と言われ、私は頭が真っ白になった。いま、46年間、皆勤で識字学級に通っている。よく子どもたちから、「46年間、よく皆勤で通われている。尊敬します」と言われる。子どもたちに人気の私の詩があります。「流れ星は止められないが、差別は人の心でとめることが出来る」、当初は地域でも識字に通うことをとめられたが、これまでがんばってきた。私の夫も読み書きができなかった。二人で商売をしていた。識字学級のおかげで、その後、経理も労務もできるようになった。夫からは「識字さまさまや。解放運動さまさまや」、自分も病気が治ったら識字に通いたいと言われた、それがとてもうれしかった。

三重 小学2年生の女の子が、一年生の時からほとんど学校にこれていない。たまに学校に来ても、同じことを何度も繰り返しやっている状態で、全然、学習が進まない。家に行っても、親が会ってくれない、学校に来させて欲しいと言ってもダメ。そのお母さん自身も学校に行けていなかった。子どもが5人いるが、上の二人も学校へいかず、中学校を卒業しても就職もしていない状況で、上のお兄ちゃんが下の子の面倒を見ている。どうやったら、親と信頼関係が築けるのか悩んでいる。

大阪（報告者） この子がどうやったら変わるかでなく、自分がどう変わるのかが大事だと思う。お母さんも自分の親から、ちゃんと育てられてないと思う。お母さんはどうでもいいから、子どもをなんとか守る必要がある。

大阪 今の三重の先生の話聞いていて、そこにも識字の可能性があったと思った。私は初任が松原3中だった。そのときの教え子に先日、久しぶりに会った。その子は小学校のときに学校で嫌な思いをしたり、家がすごくしんどくて学校に来れていなかった。その子は成人しているが、先日、識字で再会した。学校に来ることがすべてでなく、将来的なことを保障するとしたら、どれだけ思いを持って、その子と向き合っているからが大事だったと思った。その子にとって大事なことを考えて欲しい。これまでの識字の在り方と、これからの識字のあり方、識字の可能性を考えていきたい。

大阪 松原の識字生です。自分は高校を卒後しているから読み書きはできるが、4年前に識字学校に入った。私には発達障害がある。それが分かったのは子どもも発達障害だったから。子どものことを通じて、自分も発達障害だと自覚した。50年近い人生、わからずにきていた。ずっと他人とのコミュニケーションがうまくいかず悩んでいた。今、子どもは21歳。識字に通うなかで、私も子どもも成長させてもらっている。

報告者まとめ

報告者（三重） 昨年12月から何度もレポート検討をしていただいた。今日にいたるまでにいろんな成長があった。自分の中では完成のつもりで原稿を持っていた。当初は活動報告を中心とした原稿だった。でも、私の心にある自分自身の醜い部分をさらけ出すことを通じて、みなさんからの

ご意見をいただけたと思っている。みなさんへの感謝の気持ちでいっぱいだ。

報告者（大阪） 全同教は一度来たら、また来たくなる。来たら一言でいいから話して欲しい。全同教きたら、毎回、あたたかくなって、ほっこりして帰れる。みなさんも、元気な顔で笑顔で帰ってください。

報告者（大阪） 2日間、おつきあいしてくださり、ありがとうございました。次に会えることを楽しみにしています。来年、新潟で会いましょう。

報告者（長野） 自分の地域の子どもの会の報告をさせてもらった。各地域の状況は違うが、それぞれの特色を活かして子ども会や識字学級、青年団の取組を聞くなかで、私自身が励まされる思いをした。元気と勇気をたくさんもらった。ありがとうございました。

報告者（福岡） 私の地元の識字教室は57年め。識字で大事にしているのは「痛みの共感」ということ。そのことを通して、自分の生き方も変わるし、動きも変わる。自分はまだまだと痛感させられた。自分はどれだけ共感できたのか、子どもたちや支部の親たちの痛みにどれだけ共感できたのか。12月8日に差別落書きを消す。そこに集まってくる人たちの痛みに、どれだけ共感できるか。これからもしっかりと啓発の場で頑張っていきたい。ありがとうございました。

報告者（高知） いままで胸を張って、太鼓を通して、青年団を通して居場所づくりとしてやってきた。その報告に共感をいただけたけど、新たに誇りを持ち太鼓を通して、息子や地域の子どものちとの絆を深め、これからも50年、60年と活動を続けていきたい。

報告者（高知） 報告が一番最後だったので、この3日間ずっと考えていた。みなさんの報告や発言を聞いていて、せっかくなら楽しんで報告しようと思った。とにかく先生たちには無理をしないこと。地域に入ってきてくれるのはありがたいけど、自分を大事にして、余裕があれば来てほしい。家族と一緒に太鼓のイベントにきてくれたと思う。無理をしないで、続けていきましょう。

全体まとめ

協力者 2日間、5つの報告があった。報告を聞いて方は、報告書に書いてないことをたくさん聞

けたと思う。先ほど報告者から「あったかい気持ちになって帰れる」との発言があったが、私もあったかい気持ちで帰れる。私は小学校の教員をしていて、いろんなしんどい事や嬉しいことがあったりする。毎日がジェットコースター状態だが、特に火曜日の夜が気になる。以前、勤めていた小学校の教え子が現在中学生になっているが不登校。その子と毎週、火曜日の晩に欠かさず会っている。この前、その子のことでお父さんとケンカしそうになった。そのことを報告者（識字生）に話したら、「子どもをほんとに大事だと思うなら親とケンカしたらいい」と言われた。今回私は5回目の司会になる。私にとって全同教大会はすごく楽しい行事であり、毎年、素敵な人に出会えて、あったかい気持ちになって帰れる。私が全体を通して感じたこととして、「差別は人を斬る、居場所は人をつなぐ」との発言があった。ここは「人権のまちづくり」の分科会。まさに差別のないまちづくりをすること。居場所というのは、自分のしんどいことを吐き出せる、出しても聞いてくれるところ。そのことを今日、あらためて改めて確認した。教室や識字、場所でなくても人でもいい。そのことを確認させてもらった。先ほど、宝塚市の識字生から「なんで文字が書けないのか。自分たちは書けるのに」との発言を受け傷ついたという話があった。自分も最初は同じように思っていたが、関わっていくなかで、そこに文字を奪われた歴史があったことを知る中で変わってきた。なにより、識字に通うなかで読み書き、計算だけでなく、あったかい雰囲気、いろんなことを学びあっている。自分の悩みを聞いてもらえたりする素敵な場。自分も子どもたちにしっかりと伝えられる人間になりたいと思った。「流れ星はとめられないが、差別は人の心でとめられる。」この言葉がすごく心に残った。私はいつも思っているのは「自分の当たり前を疑おう」と思っている。差別の問題について、自分がどこで差別しているか分からない。自分の中にある「当たり前」が本当に「あたりまえ」なのかをつねに点検することが大事。いろんな社会のなかにあるものに対して批判的に見られるように気にしている。差別のない社会をめざしていくときには、ある時には批判しな

ければいけないこともある。私たち自身の後ろ姿を子どもたちに見せていきたい。

協力者 分散会の進行が不十分で、たくさんの思いを持っている方の発言など、うまく保障できなかった部分もあるかと思いますが、積極的な発言ありがとうございました。実は、いま、昨日の夜中から教え子から「もうあかん」、近日中に自死するとの相談メールがきており、何度もやりとりをしている。帰ってから、すぐに子に会ってかかわっていこうと思う。2日間ありがとうございました。

協力者 この2日間の話を聞きながら、自分の祖母の事を考えていた。私も部落出身で、祖母は差別と貧困のなかで生き、読み書きができなかった。90年代に地域で識字教室がスタートし、識字生がどんどん変わっていく姿を見て、孫の私も何度も識字に誘ったが結局、行けずに、先日亡くなった。祖母は奪われた文字を取り戻すことはできなかったが、私は孫として、祖母の思いをしっかりと受けとめて解放運動、同和教育で返していこうと改めて思った。この分科会、最初は識字生の先輩たちの報告で、最後は高知の青年たちの報告だった。この50年の同和教育、解放運動の成果がこういう形で表れていると思う。子どもたちが教室のなかで、立場宣言をしていった、自分のしんどいことを語り、仲間もそれに自分の思いを返し、つながっていった。識字でも同じように、自分の事をかたり、それをうけとめてくれる居場所があった。そこで先生たちも、一人の人間として変わっていき、学校での教室での実践に還元されていく。「人権のまちづくり」は社会教育だけでなく学校教育ともすべて、つながっていたということを改めて実感した。ほんとうに2日間ありがとうございました。

協力者 この2日間、差別をなくしていくという熱い思いを持って活動されているみなさん、差別の現実と向き合いながら奪われたものを取り戻し、差別に負けずたくましく生きてこられた姿からたくさんの事を学びました。

自分も教師として、子どもたちに「差別はあかん」と言ってきたが、教師や大人自身が差別をなくす生き方をしてきたのか。その後ろ姿を子どもたちに見せていくことを通して、子どもたちに差

別をなくしていくことができるんだ、差別をなく
そうとがんばっている大人たちがいるんだ、自分
たちもそうなりたいと実感を持ってもらいたい。
子どもたちに「差別はなくせるんだ」「差別を真剣
になってなくそうとしている大人たちが自分た
ちの前にいるんだ」ということが、子どもたちが
安心できる居場所づくりにもつながっていく。こ
れからも、そんなつながりを学校の教員だけでな
く、地域社会と一緒につくっていきたいとあらた
めて感じました。2日間、ありがとうございました。